

『瓦版なまず』集成
(第25号~第31号)



震災・まちのアーカイブ

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 Phone : 078-681-6231 Fax : 078-681-6232

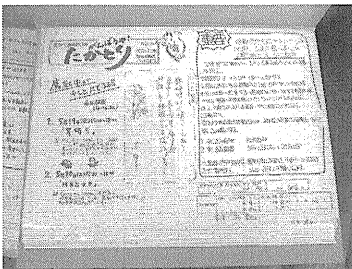
『震災ミニコミ』収集の経緯

季村範江

ミニコミという言葉から思い出す光景がある。震災からしばらくたったある日、私はボランティアをさせてくれる場所を求めて一日中長田の町を歩いていた。歩き疲れて喫茶店（当時は断水にもかかわらず、安価でお茶を飲ませてくれるお店が開いていた）で休んでいた時、一人の青年が足早に店に入って来て、無言でひとりひとりに印刷物を配り出て行った。あつという間の出来事だった。

渡された紙には『デイリーニーズ』のタイトル、長田区で営業している風呂屋などの生活情報が書かれているミニコミだった。発行元はピースボート、東京から船でボランティアや救援物資を運んで来て被災地で活動しているとマスコミが報道していた。まるで一陣の風が吹いたようなさっそうとした姿は、強烈な印象を残していった。

しばらくして私は震災資料の収集を行う民間グループ「震災・活動記録室」で活動を始めた。収集したボランティア活動の記録の中にたくさんのミニコミが入っていた。震災で日常生活が破綻した被災者に身近で具体的な生活情報を伝えるため、ボランティアグループや震災に関わった団体などによって「お風呂は〇〇に行けば入れます。」「△△に救援物資があります。」など身近な生活情報満載のミニコミがいろいろな場所で作られた。必要な情報は地域や年齢や立場などによって異なっていたから、活動している場によってさまざまなミニコミが、また日々刻々と変わる状況に対応するため、当初は毎日発行され手渡しで被災者に配られた。



「震災・活動記録室」では震災の実情、さまざまな立場の人びとが今何を必要としているか、ボランティアたちがどのように関わっているかなどその時々情報が記録されたミニコミの重要性に気づき、タイトル別にファイルして後世に残すことを決めた。震災をきっかけに生まれたミニコミ、もしくは以前から発行されていたが震災関連の情報が主となっているミニコミ

を『震災ミニコミ』と名づけ、すでに集まっているものだけではなくバックナンバーを発行元に依頼したり直接足を運んだりして、出来る限り集めて残そうとした。

創刊号から終刊号まで揃っているもの、発行途中で何らかの理由で中断したもの、発行元に問い合わせてもすでにバックナンバーは失われ数号だけのもの、メンバーたちの奔走の甲斐あってようやく『震災ミニコミ』としてファイルできたのは震災の翌年であった。

『震災ミニコミ』は1999年に51タイトル、2002年に19タイトルが「震災・活動記録室」から「震災・まちのアーカイブ」に移管された。

震災直後の混乱を極めた時期にさまざまな場所で作られたであろう膨大なミニコミは、未だその種類も数もわからないまま14年が過ぎた。「震災・活動記録室」が震災の3ヶ月後からボランティア活動の資料収集を始め、いち早く『震災ミニコミ』の重要性に気づき収集活動を始めたからまとまった数が残った、そのことはもっと評価されてもいいのではないだろうか。

『震災ミニコミ』を手にとると、日常生活が破壊された混乱ぶりや困難さや、だからこそたくさんの方の熱い思いが被災地にあふれ人々のエネルギーがみなぎっていたことを思い出させてくれる。

特に弱い立場に置かれていた人、障害を持った人やお年寄り、日本語が分からない外国人などのためにきめ細かな情報を盛り込んだミニコミがいくつも作られたが、同時に弱い立場の人の存在を世間に教える役目も果たしてくれた。

震災という言葉でひとくりに出来ない、それぞれの立場の異なった震災があるということをとくさんのミニコミは伝えてくれる。

人から人に渡されて、「震災・まちのアーカイブ」には震災に直接言及しなくても何らかの影響を受けたミニコミも含めて305タイトルが棚に並んでいる。

多種多様の震災を語る『震災ミニコミ』は、震災を過去のことと思わない人がいる限り、これからも作られ手渡されてゆくことだろう。

「震災ミニコミ」一覧

【第1陣】

青空ふれあいセンターだより（仮設押部谷第2住宅）、Act Together（兵庫県学生ボランティア協議会）、紫陽花（カトリック大阪大司教区中山手救援本部）、芦屋市民学生救援隊ニュース（芦屋市民学生救援隊）、ウィークリーニーズ（すたあと長田）、ウィング通信（ウィング支援隊）、SVA活動日記（SVA神戸事務所）、お風呂たすけあいニュース（風呂ネット）、外国人地震情報センターニュースレター（外国人地震情報センター）、がりばーほっと通信（がりばー王国）、かわら版（阪神大震災地元NGO救援連絡会議）、きやっちボール（ASA鈴蘭台(側岸本新聞鋪)、救援本部FAX通信（兵庫県南部地震障害者救援本部）、教区新報HYOGO（浄土真宗本願寺兵庫教区教務所）、神戸復興新聞（神戸復興塾）、地震ニュース（兵庫県被災者連絡会）、社会福祉復興本部ニュース（兵庫県社会福祉協議会）、障害者による復活・救援活動 兵庫県南部地震情報（被災地障害者センター）、障害者救援本部通信（障害者救援本部）、情報センター/ネットワークニュース（阪神淡路大震災「震災記録情報センター」）

震災研究センター（兵庫県震災復興研究センター）、素手（カトリック大阪大司教区中山手救援本部）、須磨ボランティア便り（須磨ボランティア）、須磨居留通信（アルティック須磨ボランティア）、生活情報（西神戸 YMCA）、セバニュース（神戸ユリサティアサイセンター）、鷹取中避難所通信／がんばろや！たかとり（鷹取中避難所ボランティア本部）、たすけて一新聞（兵庫県被災者連絡会）、多文化共生センター会報 WAH！（多文化共生センター）、デイリーニーズ（ピースポート）、てらっこ通信（神戸大学学生救援隊）、都市生活生協支援救援ニュース（都市生活現地救援本部）、ながた・関東・かわらばん（阪神高齢者障害者支援ネットワーク関東支部）、なの花だより（ボーアイ第6仮設自治会）、ニュース兵庫県南部地震外国人被災救援対策委員会とよなか（兵庫県南部地震外国人被災救援委員会とよなか）、兵庫県南部地震救援活動情報（アジア協会 アジア友の会）、兵庫労働総研（兵庫県労働運動総合研究所）、ニュースリリース（都市生活現地救援本部）、番町通信ばんばん（日本聖公会 阪神大震災被災弱者自立支援長田センター）、ひまわり通信（本物を感じる会）、ファックスネット生活情報（県立神戸生活科学センター）V日報（応援する市民の会）、ふっこうべ（コープこうべ兵庫ボランティアセンター）、ブリッジ（SVA 曹洞宗国際ボランティア会）、ぼちぼち通信（ちびくろ救援グループ島根支部）、ボラコミ通信（芦屋市ボランティア委員会）、ボランティア情報（とちぎボランティア情報ネットワーク）、夜まわりつうしん（カトリック大阪大司教区中山手救援本部）、ライフライン（さきがけ神戸）、労働・雇用ホットライン共同デスク（被災労働者ユニオン）、六甲ステップ（六甲小学校ボランティア本部／大阪仏教支援センター＋アークス関西発行）

【第4陣・第5陣】

義民つうしん（日本基督教団兵庫県南部大地震ボランティアセンター）、きょうどう（コープ神戸）、きんもくせい（阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク）、じしんなんかにまけないぞ！こうほう（° 阪神大震災° 現地救援基地）、須磨人通信番外編（須磨人倶楽部）、たまねぎ（ザ・ボランティア95大富亮）、地球市民クラブ「地球のきもち」（有限会社 地球市民企画室）8ごう4かいNEWS（県大阪神大震災支援グループ名古屋本部）、囃子だ！（神戸アジアタウン推進協議会）春風だより（隅田美香）、HAL基金（(財)まちづくり市民財団）、バンビーネット（鹿の子台ボランティア連絡会）、ひまわりだより（ひまわりの会）、ひろば 長田地区高齢者・障害者緊急支援ネットワークニューズレター（長田地区高齢者・障害者緊急支援ネットワーク 中辻直行）ファックス市民情報（震災被災者を支える東京連絡会編／市民活動FAX情報ネット発行）、VNN（市民連合ボランティアネットワーク）、ふきのとう（震災で奈良に移った人の会）、復活！たまねぎ（グループたまねぎ）、ぶどうの会通信（C.S.V コミュニケーションサービスボランティア）、ボーアイ第二仮設ボランティア通信（第二仮設4010仮設ボランティア）

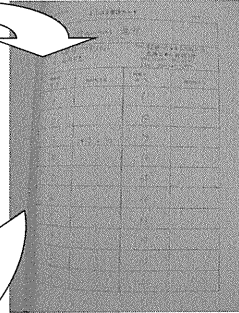
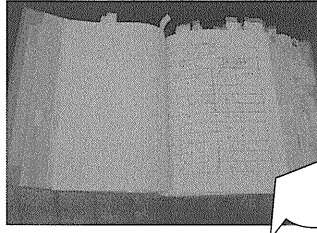
ミニコミ誌 只今 整理中

現在、震災・まちのアーカイブでは、「震災ミニコミ」の整理を行っている。

整理は、次の順序で行っている

1、台帳に登録する

⇒台帳には、タイトル、発行所（名前、住所）、
号数リスト、発行日を一覧にしている。



2、ミニコミをファイリングし、番号をつける。

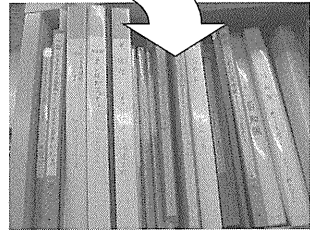
⇒アーカイブ収集のものと区別するため、シールを
貼付する

3、ファイルを棚にならべる。

気づいた点

同じミニコミでも、号数の取り方がマチマチ。

たとえば、創刊準備号、創刊号とか、終刊号の後に、増刊号があるなどです。「もう終わりと思
ったけど、また出したくなったから」というノリで発行されています。つまり、ミニコミは、発
行者の気持ち次第のものなのです。



人と結ぶということー西枇杷町から

藤原直子

余命3か月のがんの告知から2年あまりを生き、昨年6月、兄は52年の生涯を閉じた。その
後、私は離れて暮らした兄妹の時間を埋めるように、兄の生きた跡を追い求めている。喪の途上
にいて兄を取り巻く人々に出逢い、私は背中を押されている。人々との応答の中で再び兄は立ち
上がり、その手を私に差しのべる。

昨年9月、愛知県旧西枇杷町（現清須市）の西方寺で行われた、『佐々木康哲さんをしのぶ会』
に招かれ出かけた。この町は2000年9月、東海豪雨で新川の堤防が決壊し、町の大半が水に浸
かる被害を受けた。兄はこの災害から2年間、『負けせんぞ！水害にしばい』のメンバーと共にボ
ランティア活動をしながら、この町で暮らした。入院中のベッドの上で、兄は町の人を巻き込ん
での炊き出しやバザー、女性陣がバレンタインにチョコレートを携えて、町長に直談判に行っ
たことなど、楽しそうに私に話して聞かせてくれた。私の知っている西枇杷町での兄のこ
とは、ほんのわずかであった。

そのささやかな会は、故人を追悼し、思い出を語る場だけではなかった。「本当に大事な
のは、できるだけ身近な人を確実に支えること。自分のおうちの誰かさん、前に住んでいるおばあ
ちゃんに、おはよう、元気！って声をかけることが必要で、そのとき、そのおばあちゃんの心は少
しだけ支えられると思う。でもそういうことが、なかなかできません」。会場に流された当時のビ
デオの中で、一緒に活動したこともたちに、兄は話しかけていた。この言葉は一人の教師によ
って子どもたちに伝えられ、西枇杷町に住むお年寄りへの訪問は続けられている。8年前にこども

だった20歳の青年は、今もボランティア活動を続け、働きながら家族を支えているという。水に浸かった町で、こどもは遊び場を失い、母親たちは頭を抱えていた。「みんながたいへんなどに、こんな相談はできないと困っていたら、佐々木さんが声をかけてくれました」。そう話す女性は、その後、子育て支援のボランティアを立ち上げた。兄のこと、自分のこと、そしてこれからのことを、遺影を囲んで語りあった。そこには確かに、兄の手が差ししのべられており、みんなの背中をそっと押しているようであった。

兄は西枇杷町で暮らす半年ほど前に、最愛の人を亡くしている。その後、ひとり暮らしを続けながら、傷んだ自分をどう支えていたのか、私には想像もつかない。でも、西枇杷町に来てからのことは想像がつくようになった。「おはよう、元気！」って町の人に声をかけながら、兄もまたこの町で再生していったのだ。

昨年の夏、兄が最後に望んで叶わなかった沖縄の旅に出かけ、芭蕉布を見た。一枚の布に織り上げられるまでの工程は、気が遠くなるものであった。糸芭蕉から繊維を取り出し、一本一本、手で結んで糸にする。その糸を染め、織り上げてやっと一枚の布になる。兄は西枇杷町で出逢った人々と一緒に、一本一本、丹念にお互いの糸を結びあい、見事な一枚の布を織り上げていた。水に浸かって途方に暮れた色、最愛の人を失って悲しみに沈んだ色、人との出逢いに差しこんだ希望の色。さまざまな色が織りなされた布を、私はほればれとして見ている。私もその糸の一本にと願いながら。

富田碎花と吉沢独陽の蔵書の現況—資料の収集整理、閲覧について

季村敏夫

ふとしたことから、血眼になって資料に関わっている。狂ってしまった、そういっても大げさではない蒐集ぶり。出て来た一報があれば、すっ飛んでいく。とにかく眼で触りたいのである。なんとという組み合わせだとおもうが、女性と資料がいつしか重なり、ここへ来い(恋)、ここまで、おお行ってやろう、身もこころも。闇雲にいざなわれる日々苦笑している。

資料といっても、わたしの対象は戦前の神戸で発行された詩の同人誌。だが、集まらない。先の大地震、昭和の大水害、そして神戸空襲、戦時下の権力による押取処分などにより、同人誌の大半は散逸している。たまに古書目録で発見しても高価な値段が貼りつき、手も足も出ない。ひと晩熟考、翌日注文すると、先ず売り切れ。だれが買ってもとめたのか、おおよその見当はつくが、モダニズムを研究する彼は研究助成費で落とすのだらう。わたしはいかなる大学、研究室にも属していない。同人誌が、ただいとおしく、その佇まいに恋い焦がれる一人に過ぎないので、いかにも分が悪い。いつも遅れ、その度に、恋の不可能性に似た喪失感を抱く。

過日、尼崎の古書店「街の草」主人の加納成治の紹介で、芦屋市立美術博物館の明尾圭造をたずねた。そこには、詩人の和田英子が中心になり、戸田曉美、利根和美、米山加代

美とともに長年に渡って整理分類された故富田碎花の蔵書が保管され、閲覧できる。和田英子は、調査を基に四冊の資料目録を刊行している。貴重な仕事、労作である。目録を基に申し出れば閲覧できること、ほとんどのひとは知ることはない。知らせる努力、メディア戦略を、美術博物館は早急に検討した方がよい。詩の雑誌に限定しても、安西冬衛や北川冬彦らが外地大連で発行した幻の詩誌『巫』。光本兼一の『神戸詩人』(第一次から第三次のうち四冊)、小林武雄編集の第四次『神戸詩人』第五冊、戦後発刊の森勝美編集の『神戸詩人』。小林武雄らの『火の鳥』『火の鳥集報』。関東大震災後、芦屋の富田碎花をたずねてきたアナキスト加藤一夫の『原始』(小野十三郎も関わる)など、垂涎の同人誌が多数保管され、ひっそりと静まる姿は圧巻である。註1、2、3

『神戸詩人』昭和十四年十一月・第五冊(この分のみ橋本宇一編集)は、あのいまわしい神戸詩人事件を検証するための必読文献の一つである。大恐慌が世界大戦へと傾斜する昭和十五(一九四〇)年三月三日弘暁、警察権力により、亜騎保、小林武雄、竹内武男ら十四名の詩人が突如拘禁される思想弾圧があった。神国日本の転覆をはかる左翼文化人の運動弾圧という捏造による拘禁。つましく生きていた文学青年が突然、治安維持法違反で捕

縛、その生は監獄に封じこまれた。権力による蹂躪という神戸詩人事件は過去の事象の一つだが、世界同時不況に突入する現在に繋がっている。ちなみに来年は事件勃発七十年。保存する資料の活かし方、活かす方法を、これまでの意識にとらわれず大胆に変換、柔軟に提起する時機にさしかかっているのではないだろうか。

労作といえば、志賀英夫の『戦前の詩誌・半世紀の年譜』（詩画工房・二〇〇二年一月）は重要な一冊である。執筆の動機を引いておく。

一九九六年五月になって倉庫で亡き吉沢独陽の蔵書整理を再開した。昨年の阪神大震災で倒壊したご自宅の書庫から、ご息子の文彦氏がトラック一杯の蔵書を宮崎修二郎氏の口ききで届けて下さったのは、香川県の名所白鳥松原海浜に桑島玄二詩碑を建立した直後の盛夏であった。(中略)整理をしながら血潮が騒いだ。戦前の詩誌大系がない今日、これを活用できないものだろうか、思いたったのが吉日、文献をあさり、骨子を組み立て、資料収集にかかった。註4

志賀英夫が目録をとった吉沢独陽の蔵書(同人誌)は、現在大阪市立中央図書館(大阪市西区北堀江4-3-2)へ移管されている。過日わたしは、同人誌『黒船』『詩火線』『ばく』『新調』『守り唄』『オオゾラ』『装甲車』の有無を電話で問い合わせたが、いずれの雑誌もデータベース上検索できないので閲覧不可能と回答された。早速志賀英夫に連絡したところ、間違いなく移管したとのこと。これは、いかなる事態なのか、考え抜いた。

教週間後、詩誌『黒船』(神戸市一番町一四九〇、編集岡田湖舟)に絞って掛けあおうと、勇を奮って図書館に向かった。先ず一階の女性に綾々事情説明。直ちに三階へ案内される。資料はたぶん未整理状態だとおもうが、なんとしても閲覧したい、ほんの数分でよい、手にとって調べたいと懇願。すると、わかりましたとの返事。しばらく待つ。やがて『黒船』との劇的な対面が果たせた。図書館の女性の対応は、終始懇切丁寧だった。しかも、公開出来ない事態(館員は『志賀英夫氏寄贈詩誌目録』に基づき検索)が、いかにも申し訳ないといった雰囲気かじみ出していた。三階の「調査・相談室」の窓口で、吉沢文庫の閲覧をしたいと申し出ると、今後は即座に対応しますとのこと。教日後、再び出掛け、上記の詩誌以外に、『軽気球』(正田葦晴)『三叉路』(竹森一男)『颯風』(濱名與志春)『颯風詩陣』(濱名與志春)を閲覧、作品集を一冊も

残さなかったため、これまでよくわからなかったアナキストの笠原勉と小松原死解雄の短歌、林喜芳がよく取り上げるマルキストの坂本順一、岡田湖舟の詩、そして、伊庭駿(足立巻一)の著書未集録の随想、神若通四丁目七〇番地から出ていた詩誌『傀儡』(編集正田葦晴)などをメモした(ボン書店の鳥羽茂が寄稿した『詩火線』、永井淑の『オオゾラ』、坂本順一の『装甲車』はなかった)。資料を媒介にした人との関わり。資料がたつぐ内的な時間の積み重なり。今回、改めて考えさせられた。

余談だが、吉沢独陽は放浪のアナキスト詩人永井淑とともに、同人誌『聖樹』を刊行、昭和十一年六月に司法省刑事局思想部より刊行された『日本無政府共産党関係検挙者身上調査書』(社会問題資料叢書第1輯、東洋文化社、一九七四年、347~348頁)によれば、昭和十(一九三五)年の無政府共産党事件で検挙されている。註5

註

(1)『富田碎花資料目録』、第1集『書簡・葉書類』、第2集『雑誌類』、第3集『原稿類』、第4集『書籍類』。編集、発行は芦屋市教育委員会。

(2)『火の鳥』第一冊(昭和二十一年九月二十五日発行・編輯兼発行者、兵庫区上沢通二一四三、小林武雄。発行所、詩人集団「火の鳥」。兵庫区福原町一六 ロマン書房内)。創刊号執筆者、富田碎花、井上靖、竹中郁、足立巻一、津高和一、小林武雄、竹内武男、中野繁雄、能登秀夫、加藤一郎、八木猛、藤野克巳、芦塚孝四、山吹照雄、池田昌夫、廣田善夫、伊田耕三、亜騎保、打浪重信、内海繁。

(3)『火の鳥』を創刊する前に、ガリ版刷りの『火の鳥彙報』が四冊刊行されている。第一輯は昭和二十一(一九四六)年六月十五日発行、編輯は小林武雄と打浪重信。

(4)詩碑(陶板のはめ込み)建立に尽力を傾注したのは宮崎修二郎である。

(5)『聖樹』は昭和四(一九二九)年創刊。隔月発行。編集兼発行者は兵庫県芦屋劇場西の吉沢独陽(吉澤淨男)。同人は永井淑、下里母不知、胡桃澤源一ら。永井淑は松山生まれ、関西学院神学部などを転々、関東大震災後の東京から京都へ転居。大正十二(一九二三)年の春、中原中也に長谷川泰子を紹介している(佐藤泰正『中原中也という場所』二〇〇八年、思潮社、88頁)。詩誌『オオゾラ』(大正十五年創刊)編輯発行、詩集に『新しく見出されたマンダリンの味わい方と奏き方』など。

【新刊案内】

『記憶表現論』笠原一人、寺田匡宏編、2009年3月発行 昭和堂
歴史のオルタナティブへ。記憶をいかに伝えるか、さまざまな表現分野から論じる。

序 記憶のアクチュアリティへ（笠原一人）

映画・記憶のエコノミーに抗して—映画『ショアー』とワルシャワ・ゲットー（細身和之）

文学・エチカ、地上の声（季村敏夫）

音楽・コール&レスポンス、あるいは友愛の記憶（港大尋）

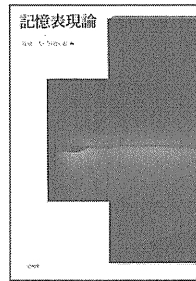
写真・受動としての写真—「ピンホールの家」以後（宮本隆司）

美術・戦争が終わって転々とするものについて（木下直之）

展示・空間の中の時間—歴史展示施設に見られるその様態（寺田匡宏）

都市・環境ノイズエレメント—記憶の複層域としての都市（宮本佳明）

建築・メモリアルを超えて（笠原一人）



お知らせ

アーカイブカフェ Vol.3 「LOVE IS」 music performance

2009年4月25日（土）13:30 開場 14:00 開演

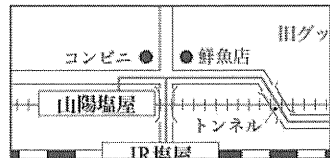
入場料：2,000円

会場：旧グッゲンハイム邸（神戸市垂水区塩屋町3丁目5-17）

JR塩屋、山陽塩屋駅より徒歩5分 ※駐車場はありません

出演：スズメンバ（本田未明、本田泉、鈴木ちひろ、ムートン、小川摩希子）、いたずらっこ（山尾圭介）

主催：震災・まちのアーカイブ 問合せ：090-8797-6632



助成金

2008年度、亀井純子文化基金より助成頂き、以下の第二回アーカイブカフェ—神戸からの便り 永田助太郎と戦争と音楽（2008年10月4日）及び港大尋の弾き語りライブ「声とギター、言葉とリズム」（2009年2月24日）を開催することが出来ました。

カンパ

菱田汐子さん（愛知県旧西枇杷町、現清須市）より
いただきました。紙面に御礼申し上げます。



活動日誌

2008年

2月10日（日）「瓦版なまず24号」の内容検討。合本出版打ち合わせ 於：事務所

2月16日（土）「瓦版なまず24号」の内容検討 於：事務所

3月9日（日）「瓦版なまず24号」印刷、発送 慰労会 於：事務所

3月23日（日）『サザエさんたちの呼びかけ』発送 於：事務所

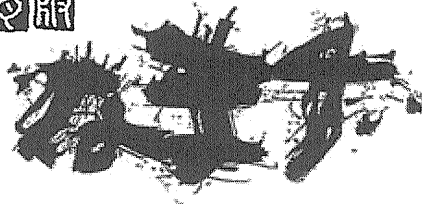
- 4月19日(土) 『サザエさんたちの呼びかけ』追加発送 於：事務所
- 5月17日(土) 詩の朗読会参加、カフェ候補地見学 於：元町、神戸市灘区水道筋商店街
- 6月14日(土) アーカイブカフェ内容検討 於：事務所
- 6月29日(日) 資料点数確認、アーカイブカフェの内容検討 於：事務所
- 7月5日(土) 資料整理 於：事務所
- 7月26日(土) 資料整理 於：事務所
- 8月9日(土) 資料整理、アーカイブカフェ事前打ち合わせ 於：事務所
- 8月23日(土) アーカイブカフェ事前打ち合わせ 於：事務所
- 9月11日(木) 早稲田大学大学院生牧山優子さん、修士論文、震災の記憶に関するインタビューのため来室
- 9月6日(土) アーカイブカフェ事前打ち合わせ 於：事務所
- 9月23日(土) アーカイブカフェ事前打ち合わせ 於：事務所
- 10月2日(木) ノンフィクション作家佐野眞一氏、新潮社記者の方々と震災一次資料閲覧のため来室
- 10月4日(土) アーカイブカフェ 神戸からの便り 永田助太郎と戦争と音楽 於：カフェP.S.
- 10月25日(土) アーカイブカフェ終了後の話し合い、資料整理、 於：事務所
- 11月3日(月) 事務所内整理 於：事務所
- 11月23日(月) 事務所内整理 於：事務所
- 12月14日(月) 事務所内整理 於：事務所
- 2009年
- 1月16日(金) 神戸新聞論説委員森玉氏、資料閲覧のため来室
- 1月18日(日) アーカイブカフェ内容検討 於：事務所
- 1月21日(水) 神戸市外国語大学学生8名来室
- 1月31日(土) アーカイブカフェ事前打ち合わせ、「瓦版なまず」第25号についての話し合い 於：事務所
- 2月11日(水) アーカイブカフェ事前打ち合わせ、「瓦版なまず」第25号についての話し合い 於：事務所
- 2月19日(木) 神戸大学地域連携センター主催の震災資料研究会に季村範江出席
- 2月24日(火) アーカイブカフェ 於：ギャラリー島田
- 3月21日(土) ミニコミ整理 於：事務所
- 3月22日(日) 瓦版25号についての話し合い 於：事務所
- 4月1日(水) 資料整理 於：事務所

【14年目の神戸】

2009年1月、14年目の神戸について、私たちが感じたことを話し合いました。ボランティアのこと、資料のことなどなど…。その場から生まれたのが、この「なまず25号」です。

14年前神戸でボランティアとして活動していた佐々木康哲さんは、昨夏彼岸に旅立たれました。2000年からは、東海豪雨水害に襲われた人々を支えていた佐々木さん。そこで出会った人たちが今ご遺族の背を支えています。神戸の詩誌の調査をしていた季村さんは、資料消失の現場に出くわしました。そして、私たちは地震直後に配られた「ミニコミ」誌の中に、当時の人々の動きを感じました。

自分たちの足元の地面が壊れた大地震。その後記録や記憶のあり方を考えることを軸に、改めて自分たちの寄って立つ場を考えはじめた場所がアーカイブです。14年目の神戸を見つめた、われわれの小さな声を、そっと皆様のお手元に届けます。(佐々木和子)



震災・まちのアーカイブ

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 Phone: 078-681-6231 Fax: 078-681-6232

遺された言葉

藤原直子

遺された言葉が、死者を近くへと呼び寄せる。「いまも地震と関わっているのは、被災者として十把一絡げにされそうになった、されてしまった、あそこ報道などによって醸された勢いに対する、うらみ、であると思っている」。震災・まちのアーカイブのメンバーであった木内寛子さんが、『瓦版なまず』に遺した言葉である。震災から16年経った今も、この言葉が私の心の中に棲み続けている。決して、感情をあらわにすることのなかった穏やかな人が、「うらみ」と、心の内を吐いている。

私が、震災資料に携わる活動を始めたのは、3年前に亡くなった兄の導きである。大阪に住んでいた兄は、震災直後から神戸に足を運んでいた。被災地でボランティアをする人たちと出逢う中、兄は彼らの活動を記録する必要を感じ、震災・活動記録室の立ち上げに参加した。その記録室に私が加わり、後に資料を引き継いだ、アーカイブでの今の活動に至っている。兄はその後、被災者への公的支援を求め、被災者支援法実現のため、国会議事堂で座り込みをするなど、被災者と共に行動し、闘った。兄と私は、神戸で場を同じくしながら、お互いの状況は知らないままだった。生活も活動も違えば、会う機会もなく時は過ぎていった。

兄が亡くなった後、それまで行くことのなかった、1月17日の神戸の街に、兄の姿を求めるように通うようになった。その街で、「佐々木さんの妹さんですか」「佐々木さんとは・・」。と声をかけられることがある。その度に私は、まだ会ったことのない兄に会う。私の知らない神戸での兄の姿である。「兄ちゃん、神戸で何して、何を思ってたん」。その思いが今、兄の遺した言葉を求めている。木内さんが、「うらみ」と、心の内を吐いたように、兄もまたその心の内を、この神戸のどこかに吐いてはいないかと。

遺された言葉が、死者を近くへと呼び寄せる。木内さんが逝って7年、兄が逝って3年。懐かしいと言わせない、時間の流れの中で、その言葉と出逢うことは、再びの喪失感を味わうことになる。それでもなお、私は死者の遺した言葉を求めている。兄が、果敢に挑んだ闘いの中で吐いた言葉、それはきっと、私の心の中に棲み続けるに違いない。

震災・活動記録室の発足時、資料を残すことの意義をめぐって、よく議論を交わした。「資料を残す、そのことだけで意義がある。そしてそれは、自分たちの想像を超える価値がある」。そ

の時出された結論が、16年経った今、ようやく実感として、身に沁みている。それは、記録室の発足に関わった兄も、おそらく想像していなかったことだろう。そして、自分が死者となって言葉を遺し、私とその資料を求めることになるということも。この被災地での、16年という時間の重さをあらためて感じている。

16年目の報告―声は、つながるか―

昨年の私たちの主な活動は、保管している資料の保存状態の点検と現在も活動を続けている人たちからの聞き取りであった。その結果を報告する。

【聞き取り概要】

1 鷹取中学校避難所資料

神戸市須磨区の最も大きな避難所。被災者と学校とボランティアとの関係が比較的うまくいったケース。ミニコミ『かんばろや！たかとり』、活動日誌、名簿、手紙などの資料が残された。避難所解消以降、地域の人たちと学生やボランティアが集うコミュニティルームが設けられ、当初は震災の記憶を伝えるためこの場所に資料を残そうという気運が高く、部屋の一角にキャビネット2つに収められた資料があった。1999年から2001年の間、私たちはその資料整理と目録取りに通った。

しかし2001年以降、各地の学校内で殺傷事件などが起こったことで、地域に開かれた学校は門を閉ざしたものに変わらざるを得なくなっていった。コミュニティルームもその使用目的が変わり、2009年他の小さな部屋に移され、保管されていた資料はキャビネット1つに収められる分量になってしまった。

2 中央区ボランティア資料

神戸市中央区区役所内で活動したグループ。「震災・活動記録室」のメンバーがその資料を預かり、私たちアーカイブの事務所に移管した。

2003年中央区ボランティアセンターを訪問した時、センターの倉庫には「中央区ボランティア」資料がダンボール4箱に入っていた。その目録をとり、アーカイブ内に保存しているものと合わせ、その年の10月に「中央区ボランティア資料」としてデジタル化、CD-ROMに収録した。

2010年3月に中央区ボランティアセンターを訪問。残っている震災資料を問い合わせたところ、どこにあるのかわからなくなっている現状を知らされる。数年前のセンター移動で倉庫も移され、所在がはっきりしないことが判明した。

3 「公的援助法」実現ネットワーク被災者支援センター

主宰者は中嶋絢子さんと北田美智子さん。神戸地方裁判所の近くに小さな事務所を構え、手弁当で被災者のさまざまな相談に耳をかたむけ、問題解決のためのアドバイスをしたり、時には相手先と同行したりしてきた

この活動を始め、自然災害の被災者支援の法律がまったく不十分であることを知り、その立法

にむけて運動をおこなった。2005年(平成10)、議員立法で「被災者生活再建支援法」が成立し、自然災害による被災者支援の道が開かれ、阪神・淡路大震災被災者には附帯決議で適用されることになった。

しかしそれでも救われない人たちがこの地域には在している。いまでも“被災者”という言葉がついている支援グループが他にないことから、問題を抱えた人がいろいろな機関を訪ねた末ここにたどりつくという。相談の内容は、震災の問題とは考えにくいことであっても突き詰めれば震災が原因になっているということが多く、困窮度は高齢化とともに拍車がかかり、問題は年月がたつにつれ複雑化してきている。そのような厳しい現実を知ってしまった二人の活動は当然続いてゆきそうだ。

4 被災地クラブ

灘区の高台、六甲の山並みを背に海を見下ろすマンション「六甲グランドパレス高羽」は1・2・3号棟178世帯が暮らしていた。地震の被害は号棟や各戸それぞれ異なっていたが、建物は全壊判定を受けた。当初補修の方針で計画が進んでいたが、途中から建て替え案が浮上、補修派と建て替え派に分かれた。補修を訴える少数派の人たちは、他のマンションの補修派と連携し「被災地クラブ」を結成、裁判闘争になった。自然災害による共同住宅の建て替えという問題が法で裁かれる初めての事例であった。

2003年最高裁の判決で、建て替え派が勝訴。2008年には14年ぶりに新マンション完成。建て替えまで長い時間がかかったため、新しいマンションに引っ越しできたのは、元の住民の約1割だった。

裁判で争われたのは、区分所有法の建替え要件をめぐるもの。建替えには所有者の5分の4以上の賛意に加え、過分の費用(補修費用が建替え費用よりかかる)であることが必要であった。判決以降、建て替え決議は所有者の5分の4以上の賛意のみで決議できるようになった。たとえ補修の方が安価だったとしても、補修が少数意見の場合、反対できなくなった。

「被災地クラブ」のメンバーで元六甲グランドパレス高羽住民の若原キヌコさんと高野紀子さんが問題提起したのは、住民間の十分な話し合いと、建て替え困難な立場の人の権利を守ることだった。結局、主張とは反対の方向に法律が改正されるという皮肉な結果になってしまった。昨今はマンションの老朽化にともないマンションの建て替え問題が浮上、今までの経験を役立てたいと彼女たちの活動は続いている。

(季村範江)

【アーカイブから】

これらのグループは、震災・まちのアーカイブが以前から関係をもっているところである。当初、「現地保存」を訴えていくというのを、グループの活動方針の一つにあげていた。それが、どうなのかを図らずも、検証することになった。

1 鷹取中学校避難所資料、2 中央区ボランティア資料はともに、アーカイブが現地保存に力を入れてきた資料である。いずれも、目録作成をおこない、保存をお願いしてきた。しかし、今回の調査で明らかになったのは、現地では保存がなかなか困難、10年程度でわからなくなる、散逸がはじまっていたということであった。

それは、鷹取中学校では、避難所運営にかかわっていたボランティアが、時間の経過とともに学校に関わりにくくなってきたこと、中央区ボランティアでも場所、人の移動が関与していた。われわれの側も、きめ細かいケアができなかったことによる。そういう意味では、現地保存の限界を見せつけられた思いがした。

一方、公的支援ネットワークの活動は、「被災者生活再建支援法」はわれわれ被災地からの声のできた法律だということ、生きていく権利を奪われたときに、正当に怒りを表明することの大切さを思い出させてくれた。そして、震災がもたらす災禍がいかに人々に影響を長くもたらすのか、そして弱い人に集約されていくのかということを考えさせてくれた。

被災地クラブのメンバーと接触したことで、別のメンバーからも連絡をいただいた。そこで、聞いたのは、国連に住まいの権利について訴えられて認められたことなど、報道があまりされていない内容だった。資料もまだもっておられるとのことだった。話を聞きに行こうと、メンバーで話し合った。まだまだ、資料や話が埋もれている。私たちが動きだせば、それに答えて向こうからやってくる。

人と防災未来センターのような大きな組織ではないが、「声をつなげよう」との思いをもって動き出せば、まだ声を拾える。小さな一歩を、また踏み出そう。そして、その声を、「紙」資料で発信していこうと話し合った。

(佐々木和子)

事実と推論

季村敏夫

旧蠟、紐でくくられた「平野謙追悼特集」を古本屋の店先でもとめた。それは、無造作にダンボールに入れられ、歩道の端に置かれ、師走の寒風を受けていた。画家の林哲夫に会ってからというもの、路上の古本詣が楽しくなっていた。

思わずもとめたものは、いずれも1978年6月号で、『文藝』『新潮』『文学界』『群像』、あわせて300円だった。現在、文芸時評で一世を風靡した平野謙（追悼号に名を連ねていないが、歌人の岡井隆は名古屋の旧制第八高等学校の後輩である）を語るひとは少なくなったが、東大の学生新聞誌上の大江健三郎を見出したのも彼だったかとおもう。追悼号だから、生前のつきあいを綴るものがほとんどだったが、吉本隆明のものだけが違っていた。「平野謙にもっとも突っかかってきたがもっとも恩恵をうけたような気がしている」と書きながら、恩恵の源を挾っていたところが群を抜いており、わたしたちのグループが現在抱える記録と記憶の問題に繋がって来るので、少し長くなるが引いてみる。

「わたしには文献実証主義にたいする抜き難い不審がある。あるひとつの<事実>とそれと関わりがありそうな<事実>があったとき、その二つの<事実>を関連させる推論の仕方は無数にあるというのが<言語>という思想の立場である。<事実>はどんなに累積しても並べ変えても何も語らないとわたしは信じている。無理に<事実>に語らせた推論で納得させられたことはほとんどないといっていい。平野謙が「しゅうねく」情熱を傾けて死の近くにもした日本共産党「リ

ンチ殺人」事件に関する膨大な論証の書もおわしを論理的に納得させなかった。わたしには平野さんの推理癖の暗い側面に思えたことを白状しておきたい。わたしにも事理を超えても固執したい体験的な思想の核はある。それ自体の無意味さ、空しさが歴史的に立証済みであるような下らぬことに血道をあげていることになっているに相違ない。ここまでくるといつもわたしは、人間はもともと個人としてみれば、客観的にはちっぽけで無意味であるようなつまらぬことに生涯を潰してしまうことによって辛うじて存在しうる存在ではないか、というかなり永続的な思い込みにゆきついてしまう。」(「断章」、『文藝』昭和58年6月号所収)

僅々数年、わたしは『兵庫文学雑誌辞典』なるものをひとりで編集している。元來調べものは苦手、だからいつも作業は難渋する。三つの証言があつて初めて事実と確定できるとは、『レイテ戦記』の大岡昇平の基本である。わたしはその態度に従ったが、今回の仕事で三つ揃うことは稀であった。記憶違いや思い込み以前の、丹念に資料を整理分類する作業への軽視があるとでもいうほかない記述が少なくなかったからである。



図1 元町の「本庄」パンフレット

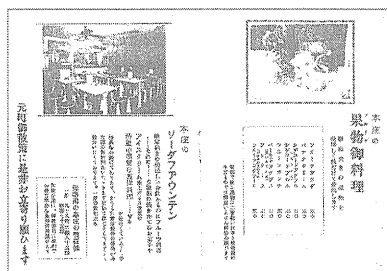


図2 ソーダファウンテンのパンフレット

図版は元町通3丁目にあった「本庄」というソーダファウンテンのパンフレットである。ある日これが、東になった資料群から飛び出てきたと、「街の草」の加納成治から頂いた。『窓の微風』を上梓した後のことだった。加納成治が探しあてた「本庄」と兵庫県の職員だった及川英雄が著す「本庄」(元町通1丁目)との関連がわからない。地名からすれば別のようなのである。しかしひょっとすると誤植、勘違い、推論が生まれ出る。及川英雄の「本庄」を引いてみる。

「元町一丁目にカメラ店が経営していた喫茶店(本庄)があったが、ユニフォーム姿の清楚な少女たちを揃えていたので若き芸術家たちの巣になっていた。(中略)本庄喫茶店の前の路上で、夕暮どきから毎夜古本市を出していた、ぎょろっと大きな目をした一癖あり気な精悍な大道商人がいた。これがアーネキストの田代健である。田代は西灘の原田とごろを巻いていた「黒鬮社」の同人で、乾市松・佐藤鉄心(佐藤少将の倅)、宇治行忠(現在は日蓮宗妙心寺の住職で梵語仏典を訳している)や、大杉栄の友人で「牢獄の花嫁」を

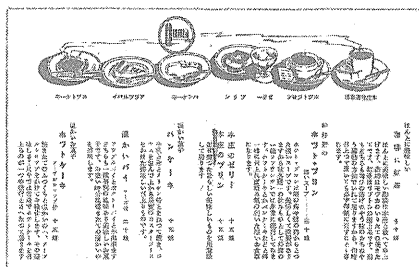


図3 本庄のパンフレット

訳した安谷寛一、ダダリスト（当時）だった飛地義郎などと親交があったが、常に特高の要視察人として監視されていたが、商売にはなかなか熱心で実直なところがあった。（中略）田代健はその後上海に飛び、同地の内山書店の主人内山完造などの厄介になりながら、アナキズム運動をやっていたらしいが、遂に工部局に逮捕され、内地に強制送還を命ぜられて神戸に帰って来たが、帰ってからは運動から足を洗ったらしく、大八車に野菜を積み込んで、八百屋行商を始めたのであるが、彼は私にとって、悪友三羽鳥の一人で色々和不快な思い出ばなしがあるが、彼が一つの宇宙と化した今は、やはり良かれ悪しかれ、なつかしい思い出というほかはない。」（『書き流し神戸 其二、『半どん』27号・昭和39年所収）



図4 ミルクエツグノツグのパフレット

パンフレットに、「ミルクエツグノツグ」という「鶏卵と牛乳にお好みのかほりをつけたもので各種のビタミンを多量に含んである栄養飲料」がある。この栄養ドリンクをあおり、神戸の闇を闊歩したアナキスト群像。こんな夢想もつまらない一つであるが、事実の累積作業にはかない夢想をそそぎこめば、推論のレベルは一変するという<言語>という思想の立場は成り立ちうるのであろうか。

なお田代健、乾市松、佐藤鉄心は『日本アナキズム運動辞典』（ぱる出版）にも『日本無政府共産党関係検挙者身上調査書（東洋文化社）』にも記載はない。宇治行忠は宇治木一郎（別名、行忠）として載っている。飛地義郎は神戸のカフェ「ブラジル」で開催された萩原恭次郎『死刑宣告』（大正14年）の出版記念会に出席している。

2011年2月2日 擱筆

ノミトビヒヨシマルの独言

詩集

著者=季村 敏夫（きむら としお）
装幀=間村 俊一

いささか醜い背骨のない虫けらが拳ほどに小さく跳ねる。その一身を歴代の酷い記憶が圧する。吐息は潰される。だが、起き上がれと促すものがある。もう一度、あがく。風の中へ歩み入る。

2011年1月17日発行 書肆山田

【新刊案内】

『阪神・淡路大震災像の形成と受容—震災資料の可能性—岩田書院ブックレット歴史考古学系7』
板垣貴志、川内淳史編、2011年1月発行 岩田書院

2008年12月に開催された歴史資料ネットワーク(史料ネット)主催シンポジウム「震災・記憶・史料—阪神・淡路大震災報道の歴史的検証—」の記録。

「第1部では、震災像の形成の中心を担った新聞記者たちの「想い」がいかなるものであったのかを考えたい。そのことは、新聞(および震災報道)自体もまた、新聞記者の「想い」が付託された震災資料にはかならないと考えるからである。

その上で、第2部では、今後震災像の形成を担う歴史家が、震災資料に込められた「想い」を読み解きつつ、いかにして「歴史」の阪神・淡路大震災像を構想しうるのが、そのことについて考えてみたい。

こうしたことから、震災像を形成する上での震災資料の「可能性」が展望できるものと考えている。」(「はじめに」より)

■第1部 震災資料を生み出す<新聞記者>

第1章 報道の温度差 (朝日新聞) 山中 茂樹

第2章 阪神・淡路大震災報道の検証

—東京の記者の記憶から— (読売新聞) 堀井 宏悦

第3章 15年間の震災報道

—現場からの報告— (神戸新聞) 石崎 勝伸

第4章 10年間の震災報道シンポジウムの軌跡

—報道の原点から被災地間連携へ— 板垣 貴志

■第2部 震災資料を読み解く<歴史家>

第5章 市民が描いた阪神・淡路大震災 吉川 圭太

第6章 震災とミニコミ—読む・集める・保存する— 佐々木 和子

第7章 日常と非日常の断層 —大震災を生きる— 川内 淳史

震災資料所蔵機関一覧



活動日誌

2009年

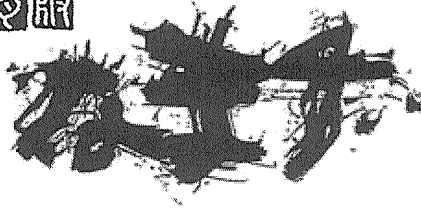
- 5月17日(日) 事務所内整理 於:事務所
- 6月14日(日) 事務所内整理 於:事務所
- 6月28日(日) 事務所内整理 於:事務所
- 7月19日(日) 事務所内整理 於:事務所
- 8月 2日(日) 事務所内整理 於:事務所
- 8月30日(日) 事務所内整理 於:事務所
- 9月20日(日) 事務所内整理 於:事務所
- 10月11日(日) 事務所内整理、アーカイブカフェ事前打合せ 於:事務所
- 11月 8日(日) 事務所内整理 於:事務所

- 12月13日(日) アーカイブカフェ打合せ 於:事務所
- 12月22日(火) アーカイブカフェ 於:旧グッゲンハイム邸
- 2010年
- 1月23日(土) オリエンテーション参加 於:たかとりコミュニティーセンター
- 2月14日(日) 今後の活動について意見交換、震災資料の所在について調査 於:事務所
- 3月2日(火) 中央区ボランティアセンター訪問。垂井さんと意見交換
- 3月14日(土) 今後の活動について意見交換、震災資料の所在について調査 於:事務所
- 3月30日(火) 鷹取中学校所蔵の震災資料視察、教頭先生との意見交換 於:鷹取中学校
- 4月11日(日) 瓦版なまずについての話し合い 於:事務所
- 6月5日(土) 今後の活動について意見交換、木の伐採 於:事務所
- 6月26日(土) 神戸女子大でのイベントについての話し合い 於:鴻華園
- 7月18日(日) 今後の活動について意見交換、瓦版なまずについての話し合い 於:事務所
- 7月20日(火) 中央区ボランティアセンター訪問。垂井さんから中央区ボランティアの資料について話を聞く
- 8月29日(日) 中央区ボランティア資料、鷹取中学校資料について、瓦版なまずについての話し合い 於:事務所
- 9月12日(日) 事務所内整理 於:事務所
- 10月3日(日) 聞き取り調査について意見交換、瓦版なまずについての話し合い 於:事務所
- 10月22日(金) 午前、鷹取中学校訪問、避難所資料を閲覧。午後、「公的援助法」実現ネットワーク被災者支援センター訪問
- 11月3日(水) 鷹取中学校、被災者支援ネットワーク訪問報告、瓦版なまずについての話し合い 於:事務所
- 11月28日(日) 瓦版なまずについての話し合い 於:事務所
- 12月13日(月) 被災者クラブの聞き取り、於:阪急六甲駅周辺
- 12月16日(木) 人と防災未来センター 阪本、定池、宇田川、各研究員来室
- 12月25日(土) 瓦版なまず26号についての打合せ 於:事務所
- 2011年
- 1月23日(日) 瓦版なまず26号についての打合せ 於:事務所
- 2月13日(日) 瓦版なまず26号についての打合せ 於:事務所
- 3月20日(日) 瓦版なまず26号についての打合せ 於:事務所

二年ぶりの瓦版は、震災資料をめぐる16年目の神戸を取り上げました。資料を後世に残す活動は時間の経過とともにいろいろな問題が浮上し、あらためて活動内容を見直していた矢先に東北関東大震災が起きました。震災を体験した身には他人事とは思えないことばかりで心が痛む日々を過ごしています。

被災された方々はこれからさまざまなことを経験しながら立ち直ってゆかれることをいひます。やがてこの出来事を後世に伝えたいと強く思う人が出て来られるかもしれません。その時は私たちのささやかな経験が役立つのではないか。資料を残す活動は救援活動や復旧活動より遅れて始まり長く続いてゆくもの。いつかどこかでつながる日がくることを信じて、今は見守ってゆこうと思います。

(季村範江)



震災・まちのアーカイブ

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 Phone: 078-681-6231 Fax: 078-681-6232

18年目の資料

佐々木和子

昨年9月、以前一緒に震災関連資料調査をおこなっていた柴田和子さんから、震災・まちのアーカイブに、資料整理・保存の依頼があった。資料の所蔵者は、語り部ボランティア「グループ117」代表の長谷川忠一さんだという。

柴田さんによると、枕元にいつも置いている震災資料を、「そろそろきちんと保管してくれるところに引き取ってほしい」、「1枚1枚に意味があり、それは資料を見ただけではわからないので、資料履歴について自分に聞き取りをしながら整理してほしい」とのこと。柴田さんも聞き取りなどのできる範囲で同行されるつもりで、私たちに連絡してこられた。

後日、長谷川さんが、柴田さんとそのご子息とご一緒にアーカイブに来られた。長谷川さんの資料は、避難所、仮設住宅、語り部活動と震災後17年間すべての時期に及ぶ。長谷川さんの活動の全軌跡である。それらを「柴田さんに資料をすべてまかそうと以前から決めていたし、そのように言ってきた」とおっしゃった。

長谷川さんと柴田さんのおつきあいは長い。震災直後、中央区にあった避難所リーダーの長谷川さんと、中央区避難所連絡会の議事録作成に大津から通っていた大学院生の柴田さん、それ以来である。その後、長谷川さんはポートアイランドの仮設住宅、中央区の復興公営住宅と居を移された。その間、震災体験を語るボランティアグループを立ち上げ、自らの震災体験を語る活動をされてきた。柴田さんは、記念協会での資料調査を経て、現在大学講師をされている。プライベートでも結婚、出産を経て1児の母となられた。震災から17年の時の流れの中で、人々の生活は大きく変わった。変わらなかったのは、長谷川さんが柴田さんに寄せた「信頼」であった。

2011年には、震災・まちのアーカイブでは三浦照子さんの資料を預かり、一次整理をおこなった。三浦さんは、季村敏夫さんの知人。私たちが以前から関心を寄せてきた「被災地クラブ」(被災マンション建替に異議を唱える人たちの集まり)のメンバーでもある。預かった資料には、本号で紹介されている「人間居住会議関連資料」や「藤和芦屋ハイタウン関連資料」が含まれている。三浦さんが震災後闘った「住む権利」の資料が、17年の月日を経て、アーカイブにやってきた。

3月の終わり、私たちは長谷川さん宅を訪れ、段ボールの箱に入った資料群をみせてもらった。避難所リーダーをされていたとき、長谷川さんは、人が捨てようとしたメモ1つも何かに役立つだろうと保存用の袋にいれられたという。残そうと思われた理由はとお尋ねすると、「こんなが残らんと、何がおこったかわからんようになってしまうやん」とおっしゃった。

東日本大震災発災から1年。2011年5月に、東日本大震災復興構想会議が決定した「復興構想7原則」の原則1に、「大震災の記録を永遠に残し、広く学術関係者により科学的に分析し、その教訓を次世代に伝承し、国内外に発信する」とある。

今年2月には国立国会図書館が、その原則1に応え、「東日本大震災アーカイブ構築プロジェクト」を開始した。そのシンポジウム(3月14日開催)では、キーワードとして、「デジタルアーカイブ」「記録を作って残す」があげられたという。

確かに、今回の震災では、インターネットを通じて多くの情報が行き来した。写真などはネット上の地図とリンクさせ、「いつ」「どこ」のものか一目瞭然である。ただ、三浦さんや長谷川さんが17年後に持ってこられた資料のような、日々の生活や活動の中で生成されている現場の紙資料はどうなるのだろうか。東北の地でも、走り書きの資料を袋に入れている人はきつといる。この人たちの闘いや活動のあとは、どのように引き継がれるのだろうか。

人と人が出会う旅

季村範江

東北の大地に真っ白な長い布がかけられ、まわりを染料の入ったバケツと刷毛を持った人びとが囲む。一斉に布に色を塗ってゆく。色と色が重なり、太陽に照らされ風にふかれ少しずつ複雑な色に変わってゆく。

野外で一枚の布を自由自在に染めることを野染めと名付けたのは、京都在住の染色家齋藤洋さん。野染めは17年前、阪神・淡路大震災の被災地神戸で行われ、昨年の6月からは東日本大震災の被災地でも行われている。齋藤さんは主に災害で厳しい立場におかれている障害者の学校や施設を選んで交友を重ねている。

私は昨年9月、岩手県の障害者の施設や仮設住宅を廻る野染めの旅に同行させてもらった。被災地の人々は明るく振舞ってはいるが、突然我が身にふりかかった災害の大きさにたじろぎ、受けとめかねていた。

真っ白な布が美しい色に染まってゆくうち、そこに集う人びとの心が解け出し表情が柔らかくなっていった。野染めの後には縫い物や編物を一緒にする。すると、今まで心の中に抱え込んでいたいろいろな思いがあふれ出てきた。外から人が訪れ一緒に作業し、自分の見たこと体験したことを聞いてもらうことで、硬くなっていた心に風が通り抜け気力が戻ってくるようだった。

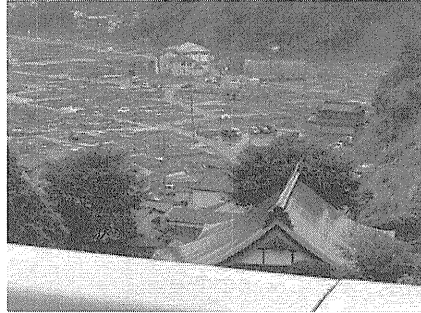
しかし訪問を重ねるうち、元気そうにしていた人が次に訪問した時は落ち込み閉じこもっている姿を見て、心の傷が癒えるには長い時間がかかるということを知られることになった。一緒に身体を動かし心を開放する、齋藤さんの野染めの旅はこれからしばらく続くことになりそうだ。

復興の街で

藤原直子

去年の年末、広島の人を案内して長田の街に出かけた。新長田駅前の商店街は正月を前に買物客もまばらで、閑散としていた。復興の名のもとに開発された街の年の瀬は、思いがけず静かなものだった。

私の記憶に棲みついた、ひとつの光景がある。3月の震災から5カ月たった夏、宮古の友人を訪ねて東北を車で走った。仙台、石巻、南三陸、陸前高田。宮古に至るまでに立ち寄った街は、何もかも波にさらわれ、荒野のようだった。かたづけられた瓦礫の山、夏草が萌え、音がなく静寂に包まれていた。その光景を前に、頭をよぎる言葉があった。「生き残ってよかったのかねえ。人が住む前はこんなだったのかなあって、毎日ここで眺めてるの」。以前、新聞記事で拾ったお婆さんの言葉だった。避難所の高台から、お婆さんは毎日飽かさずに、流された街の跡を眺めているという。大事な人や暮らしを失って、どんな気持ちでその光景を眺めていたのだろう。自分がその光景の中に身を置いてみて、わかったことがある。何もない静寂の中で、耳を傾けると死者が私に語りかけてくるのだ。お婆さんは、流された街の跡を眺めながら、死者に繰り返し語りかけ、対話していたに違いない。「生き残ってよかったのかねえ」と。



【写真】岩手県宮古市（2011年8月撮影）

震災から17年たった復興の街で、耳を傾けても、死者の声は届いてこない。「生きてよかったんかなあ」「生きてなしやあない」。復興から取り残された、恵まれない者たちのつぶやきが、私の耳に聞こえてくる。死者と語りえぬ者たちは、その声をいったいどこに返せばいいのだろうか。

傍観する岸辺

季村敏夫

昨年の今時分、たてつづけの訃報があった。二人の友人の死。バレンタインデーのあくる日、はだらの雪が庭を覆った。誰もが必ず死ぬのだ。

三月の災厄のときは、新幹線に閉じこめられた。車中、幻影の水があふれ、藻屑が躍り、生者のなかに死者が混じるという、事後的な映像がその後の生活の切れ目に侵入した。死者との問答は初夏から秋、初冬へとつづいた。年の瀬、もうひとり、友の訃報がもたらされた。これでもかと襲うもの、時の彼方から襲い来る記憶の身体というもの、あるのだ。

【ここというとき、逃げていた。距離をおき、見ぬふりをし、その記憶を沈めた。こ

ずるタイプだった。ある日、距離が狂った。今ここに亀裂、あらわになった過去に、ひきずりこまれた。他者の出来事がある、やっときっかけをつかむとは、この遅れはおぞましい。

毎日、書いた。ポケットにつっこまれた稽古帖。おもいついては書き、考え、傍線をひき、立ちすくんだ。】

これは昨年六月、相馬海岸で書きとめたもの。凶暴な牙を剥く波浪が、破碎したコンクリート擁壁を撃ちつけていた。海鳥に囲まれ、傍系、傍観者としての自分を、本腰いれて見据えようとした。陥没した荒浜、砂の風が軋りをあげていた。異様な静寂だった。

建築家の五十嵐太郎のドキュメント『被災地を歩きながら考えたこと』（みすず書房）、これは信頼できる。「考える」言葉が、立ちすくみ、歩いている。そのなかの一節に、はっとする。「東日本大震災を身近に経験し、いかに自分が阪神淡路大震災を他人事としていたのかをあらためて思い知った。」（八三頁）。

他人事、見て見ぬふり。このことは何年前の葉で、わたしたちのメンバー水本有香もふりかえていた。崩壊した家の下敷きで呻く人から逃れた。その人が瓦礫をたたく音が胸のなかでうずく、確か彼女はそういつていた。死ぬのは他者。誰かが生き残り、街のさなかに放り出される。「むごいよのう」、足の裏側を死者がさわってくる。一步も歩めない。立ちすくむ。

論語に「狷者は為さざる所あるなり」とあり、岩波文庫では「しないことを残しているものだ」という訳があてられる（巻第七、子路第十三）。孔子は巫女の私生児。イエスや行基同様、誰の子だったかわからない、最底辺の父なし児。孔子は狂狷のものを愛したようだ和白川静。梅原猛は詩人こそ狂狷の徒と応ずる（『呪の思想』）。見ぬふりをしてきた私は、分際を守り無為を貫くこと、狂狷（きょうけん）をこう受けとめ、「百川 沸騰」（『詩経』）したあとの街を歩む。九月ふたたび訪れた東北、下閉伊郡山田町のケアホームで出会った行きずりの人のたたずまいにおののく。

ここまで書いてきて、これでは編者佐々木和子のもとのめものから外れていると案ずる。いや違う。正確には、与えられた「災害（震災）と言葉」というテーマへのつまずき。逃れたいというおもいが脱線させるのだろう。

災害と言葉は並行で論じることはできない。日々刻々と生起する災害。言葉は不可避的に遅れる。阪神大震災のとき、私は全壊ということを経験、この事態をじつは待ちかまえていたと覚った。だがそんなこと、どうだというのだ。全壊は家屋だけで、内的時間は一部損壊程度、残余にどれだけ他者の痛みを抱えているのか。現に今おめおめと生き、昨日も今日もただ過ぎ去るだけの見送り方をゆるしているではないか。そのありのままから始め、なにか他のこと、誰もがおもいつかない発想と方法を編みださないと、死者から促されてもこの始末と溜息をついた。

分際ということへの自覚、自己充足は明らかに違う。おめおめ、これが、致命的に遅れる私の事態である。他人事、見ぬふりをしてきたので、現在は絶えず撃たれる。死者こそが当事者であるが不在。今ここに傍観者の息はともされるが、本当にうずきとしてあるのか疑わしい。だから自分に棒線を引き、馬鹿面をさらし、立ちつくしている。問いを促す過去、過去は未来からもたらされ、現在に沸騰。傍観する岸边、そこに、ひたひたと疑問の刃で迫るもの、今度こそ、そいつを逃してはならぬと言いつけさせる。

イベント情報① 自然民俗誌「やま かわ うみ VOL.5」発刊イベント

<シンポジウム>

震災後の表現—神戸から東北—

- 日時：2012年6月17日（日） 14時（開場13時半）～17時
- 参加費：当日1,200円 予約1,000円
- 場所：神戸風月堂（〒650-0022 神戸市中央区元町通3-3-10）
※JR元町駅下車徒歩6分、元町通南側、海文堂書店東側

第1部 レポート「神戸から東北」 季村敏夫

第2部 映像作品『3・11 TSUNAMI 2011』上映
（被災者撮影の津波映像+現場インタビュー） 宮本隆司

第3部 シンポジウム「震災後の表現—神戸から東北—」
季村敏夫、宮本隆司、細見和之、正津勉（司会）

協力：神戸風月堂、市民活動センター神戸、震災・まちのアーカイブ、海文堂書店、ギャラリー島田

【申込・問合せ先】

アーツアンドクラフツ TEL:03-6272-5207 FAX:03-6272-5208
<http://www.webarts.co.jp> e-mail:edit@webarts.co.jp

イベント情報②

「神戸からの発信（東北の復興・日本の明日）」

- 日時：2012年7月20日（金） 18時半～20時45分
- 場所：神戸風月堂（〒650-0022 神戸市中央区元町通3-3-10）
※JR元町駅下車徒歩6分、元町通南側、海文堂書店東側
- 講師：赤坂憲雄
- 鼎談：赤坂憲雄、季村敏夫、島田誠
- 参加費：1,000円（全額が「アーツエイド東北」への寄附となります）

【申込・問合せ先】

ギャラリー島田 TEL/FAX:078-262-8058
<http://www.gallery-shimada.com/contact/index.html>

音の記憶、音の記録

市村登和

街角で、たとえば信号待ちで立ち止まったとき、この瞬間に地震が発生して半日も経たない間に、自分が立っていたその場所も含め向こうの海岸線まで見通せるようになってしまうのか、と思いを巡らす。「あの時」と、今回と。そんな対比を無意識にしている。

逃げ切った人たちが残した映像には、さっきまで暮らしていた町が津波の襲来を受ける様子がある。凄まじい破壊音に、撮影する人の周りにはいる人々の言葉が重なって記録されている。あるいは、津波が襲来しなかった内陸部では、どのような音・声が残され、思い起こされているのだろうか。

17年前の地震直後、今しがたの事態をのみこめず、揺りもどしに怯え、息をひそめ耳を澄ませた。停電したことも関係したのであろうが、激しい揺れの後には、日常では起こらなかった「無音」な時間が作られた。室内の待機音もファンの音も止まり、闇に走る車の音も聞こえず、聞こえるのは互いを確認する声だけで、日常には無い静寂、冷静になろうとするが故の静寂があったように思う。

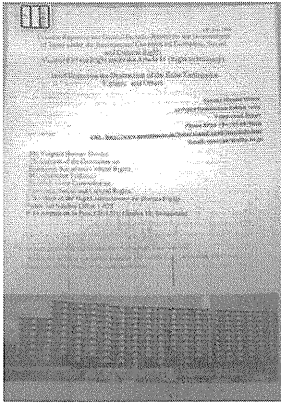
17年前に残された映像。震源の中心で残されたものは、今回と比べれば音を発することが出来る媒体の種類は少なかったのだろうか。NHK神戸支局内のモニタリング映像は地震の揺れを伝える映像として繰り返し流されたが、それを観るものには音無く届いた。揺れの直後、被災した人々が残した映像は、動画ではなく静止画の写真が多かったのではなかったか。これは、15秒間だけの激震だけであったからなのだろうか。

翻って、3月11日。映像として残されたものの多くとともに、音がある。音が無いから何も無い、のではなく、音とともに、多くが、甚大に、消えてしまった。そのことが人々の心の内の音として残っていくのではないだろうか、と、思っている。

【資料紹介】被災地から世界へ

震災から16年経った昨年、震災・まちのアーカイブは新たな資料と出会った。三浦照子氏所蔵の被災マンションに関する資料である。資料を整理しながら、阪神・淡路大震災のこと、特にまだまだ知られていない「小さな声」が沢山あると改めて思った。

阪神・淡路大震災は、人が生きていく上で「住む」という、人が持っていて当たり前権利を改めて意識せざるを得ず、確かめざるを得ず、場合によっては闘わざるを得ない自然災害となった。被災した一人の人たちがまず「なんで？これっておかしい？」という疑問を訴える先は、一番身近な自治体である。しかし、そこで理不尽さが拭えないとき、人はどうするか。その疑問を裁判所へ。しかし、自分たちの思いが通じず、国が庇ってくれないとき、人はどうすればいいのか、どこへ向かえばいいのか。



【写真】第2回「人間居住会議」関連資料

その後、彼らは国際法、「経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約（社会権規約）」、つまり国際人権A規約において人間の基本的な権利の一つとして認められている「居住の権利」に出会う。1996年6月、国際連合の主権によって「居住の権利」について話し合う国際会議、第2回「人間居住会議」がトルコで開かれた。世界中から政府やNGO（非政府組織）が集まり、“被災地の声を世界へ”と多くの阪神・淡路大震災の被災者も避難所や仮設住宅、被災マンションなどの現状を訴えた。裁判所へ、そして、日本からトルコへ。人を遠く離れた海外まで向かわせたものは何だったのか。あったことがなかったことにならないように資料を残す。この資料がまた誰かと出会うため。

(資料総点数-202点、写真-91枚)

(水本有香)

【新刊案内】

『大震災と歴史資料保存—阪神・淡路大震災から東日本大震災へ』奥村弘著
2012年2月発行 吉川弘文館 3,360円

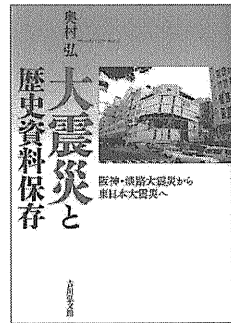
大地震・大水害にさいし、歴史文化関係者はなにができるのか。阪神・淡路大震災から東日本大震災に至る「歴史資料ネットワーク」の活動を通して、史料保全、震災資料保存、災害に強い地域社会づくりを提言する。

阪神・淡路大震災から東日本大震災へ

第1部 大規模自然災害における歴史資料保全のあゆみ（大規模自然災害と地域歴史遺産保全；現代都市社会の歴史意識と歴史学の課題；時代が求める歴史研究のあり方とは）

第2部 震災の記憶を未来につなぐ—災害資料の保存活用（震災資料の調査保存活用—歴史文化の基礎をどうつくるのか；人と防災未来センターの開設と大震災資料保存の現況）

第3部 災害に強く、豊かな地域歴史文化を生み出すために（市民社会形成の基礎学としての歴史研究の今日的位罫；地域歴史文化における大学の役割）被災史料が語る地域の近代—元尼崎藩大庄屋・岡本家文書から



活動日誌

2011年

- 3月26日(土) 瓦版なまず26号印刷・発送 於;事務所
 4月24日(日) 活動内容の検討 於;事務所
 5月11日(水) 三浦照子氏所蔵資料の閲覧
 5月14日(土) 訪問の報告 於;事務所
 5月28日(土) 瓦版なまずの執筆者への許諾書送付 於;事務所
 6月12日(日) 三浦照子氏の所蔵資料の整理方法の検討 於;事務所
 7月10日(日) 三浦照子氏の所蔵資料の整理方法の検討 於;事務所
 7月23日(土) 三浦照子氏の所蔵資料の整理方法の検討 於;事務所
 7月27日(水) 三浦照子氏の所蔵資料の整理 於;事務所
 8月6日(土) 三浦照子氏の所蔵資料の整理 於;事務所
 9月18日(日) 東日本大震災被災地訪問の報告 於;事務所
 10月9日(日) 瓦版なまず27号についての打合せ 於;事務所
 11月11日(土) 瓦版なまず27号についての打合せ 於;事務所
 12月4日(日) 長谷川忠一氏来室に関する打合せ 於;事務所
 12月9日(金) シンポジウム 於;神戸芸術工科大学
 12月25日(日) 長谷川忠一氏来室 於;事務所

2012年

- 1月15日(日) 瓦版なまず27号についての打合せ 於;事務所
 2月12日(日) 瓦版なまず27号についての打合せ 於;事務所
 3月25日(日) 長谷川忠一氏所蔵資料の見学、瓦版なまず27号についての打合せ
 於;神戸市灘区
 4月28日(土) 瓦版なまず27号印刷

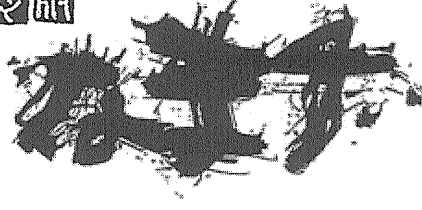
震災・まちのアーカイブ ブログ始めました

2011年3月11日の東日本大震災の発生以降、震災・まちのアーカイブの「瓦版なまず」、ホームページ以外の情報発信の手段として、ブログを開設しました(2011年4月3日)。現在は、主に東日本大震災、阪神・淡路大震災の記録などに関する新聞記事やイベントの紹介にとどまっていますが、瓦版なまず最新号のデータ版や震災・まちのアーカイブ関連のイベントの開催のお知らせなども掲載していく予定です。ご覧ください。

URL <http://blogs.yahoo.co.jp/archivesinkobe>

編集後記

2012年、私たちは18年目の長谷川さんの資料の整理を始めようとしています。やっと、資料の整理をしようと思われた長谷川さん。それを仲立ちくださった柴田さん。資料が保存されていくには、ヒトと時間が必要なようです。(佐々木和子)



震災・まちのアーカイブ

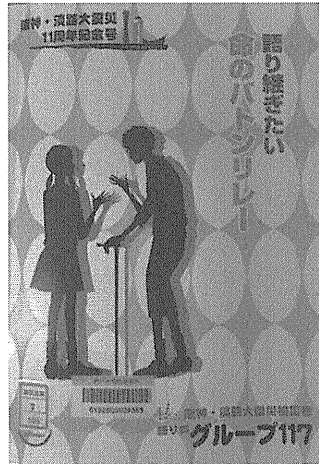
〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 Phone: 078-681-6231 Fax: 078-681-6232

次はあんたらの番やで 一震災語り部 長谷川忠一氏インタビュー

17年後に震災・まちのアーカイブに資料を委ねた長谷川忠一さん。長谷川さんは、1999年に「語り部グループ117」を結成、自らの体験を語る活動を続けてこられました。事務所で、その活動についてお話を伺いました。

—今日は活動を始められた経緯、話される内容やその姿勢などをお聞きしたいと思います。

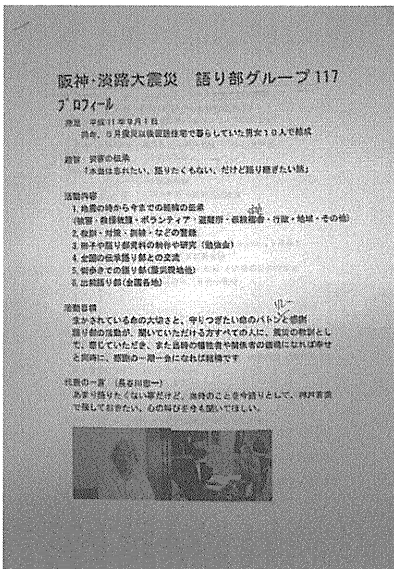
長谷川: 語り部として話をしたのは1月17日から今日まで18年。その間いろんな事が重なり合っている。語り部をやろうとしたんは、三宮にフェニックスプラザがあったやんか^{註1}。復興住宅に移ってからそこに顔を出すようになったら、学校長や教頭さんが修学旅行生に話をしていると県の職員さんから聞いた。仮設住宅におった折に花を持って訪ねてきてくれよった群馬の三郷中学校やったっけかな、その中学校から「うちの生徒がおたくの復興住宅に修学旅行で行くから」という話があった。「何かしたいな」と先生と電話で話したら、先生は「当時の話をしてくれるんだったらありがたいな」という思いやった。それがきっかけで「それやったら」ということで半年ほどたった秋にグループを立ち上げたんかな。



—同じ頃にフェニックスプラザでは教頭や校長先生のグループはもう出来ていたんですね。

長谷川: 一緒に協力しながら出来まへんか、と声をかけたんやけど向こうから無視された。それやったら自分たちでやる必要があ

る、生の声を出来るだけ届けよう。実際にあったこと、本当のことをみんな洗いざらい話してしまおう。オブラートに包んで話す必要は無いわと思ったんや。そうしていた折にボランティアで避難所に炊き出しに来ていた加西市の商工会議所から正月明けに「イベント、フォーラムをやるから来てくれ」といわれた。年末に初めて大掛かりな語り部の依頼を受けたもんやから体調崩して血便で10日程入院したんかな。



—メンバーはどうやって集められたんですか？

長谷川：最初のメンバーはポートアイランド第4仮設のメンバーが中心やったんやわ。もう一人仮設の自治会長に、相談すると、「ええことやな」ということでメンバーを集めてくれた。そやけどやりかけたら、今度は別の仮設のメンバーが「ワシに声もかけんと勝手に作って」と、それがとてもややこしくて。一人ずつ電話で、悪口やらあることないことをメンバーに言いふらして、

第一次のメンバーは、半年位でいなくなつてしもた。

—グループの名前はどのように決められたのですか。

長谷川：「語り部グループ117 (いちいちなな)」という名前は、30年来の知り合いの印刷屋がどうやというてくれた。それでワシが「117で行こか」と決めた。

—グループができれば、新聞でも取り上げてくれたのですか。

長谷川：12月1日(1999年)に朝日新聞が記事を書いてくれた。早速「仲間に入れてくれ」というて矢守克也はんから電話がかかってきた。精道小学校(芦屋市)の自由研究をやっている子どもたちからも、話を聞かせてというてきた。子どもたち3人で家まで来るというたから、折り返し学校に電話して、「直接学校へ行きますわ」と返事したんかな。ワットと騒いでいる教室で、20分位3人に話したんかな。

—どのような活動をされたのですか。

長谷川：2000年には、定期的な会合を持つようになった。依頼があったら「こういうところから依頼がある、こういうところから依頼がある」といついつやから誰それがいく、という風にメンバーをチェックしながらスケジュールを組んでいく。

依頼を受けていくやんか。初めて行く土地やから駅に迎えに来てくれるやんか。来てもらったらな、「先生」やねん。うちのメンバーが「先生」いわれたら天狗になってくるのよ。だから、「先生」って言われたら、「ちょっと待ってくれ」、「ワシらは被災者なんや」、「先生でも何でもあらへん」、「先

生は絶対にやめてくれ」というた。

—長谷川さんは「先生」と呼ばれることにこだわられています、そのことや「先生」ということのイメージはどのように持たれていますか

長谷川：先生と呼ばれることに違和感を感じる。依頼先は一切体験してないやん。体験して人の前で話すっていうたら、何かあるんとちゃうかというので向こうは持ち上げる。

—それに違和感を持たれるのですね。

長谷川：人と変わらないんやと思っていた。そういうところから、話をしとかんことには、「先生」いわれたらほんまに普通の人はな、天狗になってしまうんよ。

—長谷川さんからしたら「見上げてしまう存在」とは違うということですか。

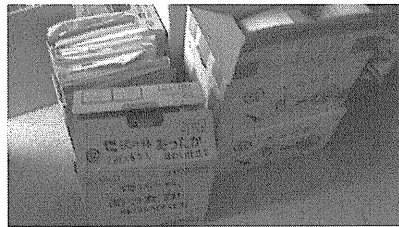
長谷川：「次はあんたらの番やで」というわけなんや。あんたらがワシの立場になったときにどうなるんや、肩書きで命が助かるわけやないんやから。

—一次はあんたらの番や、ぎくつとします。肩書きで命は助からへん、命を助けるのは命、その通りだと思います。

長谷川：それと行政の提案してくるものと被災者から出す提案のギャップいうんかな。それをものすごく感じるわけ。例えば、震災から一カ月後、避難所におった折に、新長田と六甲道に駅前の再開発構想が立ち上がったやんか。アレ見た折、「えっ、震災一カ月後にもうこんな青写真が出来あがっ

て」「これは10年ほど前に計画されていて、何かあった折にこれをぶちあげよう」と作り上げてたものが出て来たんと違うかと、疑心暗鬼になってしまった。だから「上から目線」をそのままで聞いていたらアカンということ。

行政に対する不信感もある。一つはな、震災の展示物やら色んなもの、写真なんかを集めながら、そして語り部も作ります、募集してますと新聞記事になった。「ほお、ええことやんか」と「ワシらのグループもそこに協力出来るんやったら協力しよう」と話し合っ、その準備室へ行ったんや。県の職員に「ワシらも協力させて」という話したら「あきまへん」といわれた。



—県がそういったのですか。

長谷川：「個人参加しか認めまへん」と。「その前に資料集めをお願いしたい」といわれた。「団体参加は認めへん」ということやった。それでその話をもう一度会合の中でしたんや。「ワシが会の参加を認めてくれというたら。あきまへんと断られた」とみんなの前で話した。矢守はんは「個人参加にしましょう」というた。そっから「この人はワシと違うな」と思った。

—自由に話すためにはやっぱりグループでないとだめ、個人参加で入っていったら出来そうにないな、と思われたのですか

長谷川：「上から目線」の人たちにかき回さ

れたくない。「お前らの話を」いうて、オブラート被せられる、蓋い被せられることが一番いやなんや。自由に話の出来る、制約の無いものでなければならぬと思うた。

—そう思われた理由は何ですか？

長谷川：最初から「個人参加しか認めん」という、その一言なんや。「おお、ええことやんか、一緒に協力してやろうや」というてくれたら、多少は向こうの要求ものめるんや。初めから「グループはあきまへん」いわれてしまったから、ワシが動けなかった。グループの中では別の意見もでてきた。2002年に人と防災未来センターが出来る折には、その人たちは個人参加いうてでていった。

—メンバーには変遷があったのですね。

長谷川：結成の時のメンバーは、いろいろあって半年位でいなくなった。一人二人で活動せなアカンと思っていたら、先方から電話があって「語り部参加したい」というてきた。「OK」と受け入れた。自然参加というんかな。語り部をやるたびに新聞記事にドンドン出たわけや。それに大きく取り上げられたから目につく。ワシらも参加出来るちゃうかいうて電話してきてくれた。「おいでおいで」と受け入れた。

—長谷川さんがしゃべりたかったことというのは、どういうものだったのですか。

長谷川：行政と被災者のギャップ。その中の一つが避難所と仮設の問題。避難所におった、それが仮設に移る折になんで無差別抽出するんやと。マスコミであれだけたたかれても直らなんだ。ワシらはなんで隣保、隣近所、仲間内を一つの長屋に入れてくれ

なんだんかという思いがあるわけや。そういう思いが今東北の方でも繰り返してしているように見える。家を失くしてのに、自分の勤め先がつぶれてなくなった。新しい職を求めた折に、仮設が出来た時点で、今度は「お前、仮設に入ったんか」、「いや、今まだ避難所です」というたら、「住所が決まってからもう一回来い」ということになってくるわけや。その繰り返し。そうなったら申し込んでも申しこんでも当たらへん。無差別抽選や。そういうところで本当は仮設には一番最初に入れるんは、若い家族、働ける家族を入れるべきやと、ワシは思たんや。年寄りは一入ぼっちになるよりも知り合い同士が避難所におけるんやから一番最後までもいいんと違うとかなという自分の思いがあった。神戸の間違ひ、ええとこもあったが、もう二度と同じ繰り返しを、過ちを他のところで繰り返して欲しくないという思いがある。

—語り部をして伝えたいことは、長谷川さんが体験した被災地から、これだけはいきたいこと、それは「次はあんたらの番や」とつきると思いますが、ひとことでまとめるとしたら、どうなるのでしょうか。

長谷川：自分が受けてきたことを被災者の目線で話したいということや。上から目線、先生といわれて違和感を感じる。誰かが後世にキチッと伝えていって欲しいと思っている。

—ありがとうございました。

*フェニックスプラザ 阪神・淡路大震災 付記
復興支援館(神戸市中央区三宮町1丁目7)

震災の翌年1996年7月20日、被災者支援や復興計画・復興状況についての情報発信拠点として、兵庫県が開館。2002年3月末日で閉館し、現在跡地に神戸マルイがある。

日時 : 2013年3月10日(日)
場所 : 震災・まちのアーカイブ事務所
テープ起こし: 水本有香
まとめ・インタビュー: 佐々木和子
編集: 季村敏夫

長谷川 忠一さん(1944年生)

1995年1月17日 神戸市中央区で被災。

行吉学園避難所(神戸市中央区中山手通)に避難

5月末 生田文化会館に移動

8月末 ポートアイランド第4仮設住宅に入居

1999年5月 UR 脇の浜公団住宅(借上復興公営住宅)に入居

「震災語り部」の位置—ことば、声、沈黙—

季村敏夫

阪神大震災以後に語り部ボランティアを担ってきた人びとが、東日本の災厄を契機に生まれた「震災語り部」とのつながりを模索しはじめている。両者は防災、減災の視点からの教訓の伝達というところに力をそそぎこんでいる。「犠牲者をおもえ」「忘れるな」という発想である。私の視点は、いささか違っている。むしろ大きな観点に立てば防災、減災につながるかもしれないが、そのことを拒むところさえある。そもそも、「語る」とはいかなる事態なのか。声を発する、ことばで書き記すとは何であるのかという、動詞の原初の意味を改めて考察することに力をそそいでいるからである。いいかえれば、「語る」「伝える」ということを自明の前提にしないということなのだが、龍谷大学の柴田和子を通じ、たまたま出会った長谷川忠一。阪神大震災の語り部を自ら選んで今日まで生きてこられた長谷川忠一という、一人の人間との付きあいと彼が所持する震災一次資料の整理に関わりながら、いまさらながら、動詞の原型を問うことの大切さにおもい至った。^{註1}

まず映像のことから始める。ベンヤミンにならい、映像もことばである、その観点に立ち。

宮本隆司の編集する大津波という非日常とそれ以後の日常の映像作品に、私はこれまで二度立ち会った。釜石市両石町の住民である瀬戸元が咄嗟に撮影した大津波の映像。以後

とは、惨憺たる傷跡にさえずる鶯をバックにした瀬戸元の語りを撮影したものである。日常と非日常、平穏な暮らしと災厄、時間の裂け目、落差、決定的な深淵を挟み、向かい合う二つの映像、こういった構成の作品であった。災厄の到来も鶯のさえずりも、自然からもたらされる。だが大津波の襲来のさなか、鶯はどこにいたのか。終末的光景が遠のいた後のおだやかな陽射しのなか、あの凶暴な姿はどこに消えたのか。世界とは外部とは何か、そこに誕生し、やがて消滅するとはどういうことであるのか。時間の裂け目と落差と深淵から、本質的な問いが静かに深くもたらされる作品だった。^{註2}

「わたしは地のおもてからすべてのものを一掃する」「わたしは人も獣も一掃し、空の鳥、海の魚をも一掃する」「わたしは地のおもてから人を断ち滅ぼす」註3

旧約聖書、たとえばユダヤ教の聖典をひもとけば、地上の幸せが突如壊滅する凶暴な記述は到るところにある。災厄は自然現象で、受苦のただなか、人びとは蹂躪され曝されつづけるが、「誰が命じるのか」「なぜこのような事態に襲われねばならない」、うずくまる胸に、この種の問いはいくたびも巡ってきたに違いない。

日常の裂け目、その落差をみよ、めくるめく時間の深淵に身体を投げ出せ。宮本隆司は、先ずこのことだけがいたかったのではないだろうか、ふと私はつぶやく。

災厄の映像に触れた後、「美しい」という感想がでた。ありえない破壊破滅の到来という酷薄な様相が美しい、よもやそうではあるまい。いや、自然の隠された凶暴な意思とも呼ぶべき荒々しさこそ極限的に美しい、おだやかな日常がもどった鶯のさえずりが美しい以上に。咄嗟に出た感想を、私はこう受けとめた。終末的な壊滅の到来があった。蹂躪され、不意に消滅した人間の生命。崩壊し散乱、転がりつづける事物の痕跡はときに美しく、まさにその暴力を覆い隠した日常の平穏さ、

災厄の後を覆う事後の光は美の極限の輝きと響きに満ちている、さらにこのように付け加えると、癒しとか絆とかを主張する立場にとって断じて容認し難い非人間的感想になるかもしれない。だがはたして、そうだろうか。超越者にとり、一神教の超越的思考にとり、あるいは諸行無常の天然の摂理を重んじる立場にとり、人間的とはいかなることか。宮本隆司が黙示する落差と深淵の向こうから、「崇高」「美しい」という響きが訪れる。^{註4、5}

旧新約聖書には、荒野をさすらい、声を発する人の姿がある。発しているのは預言者と呼ばれ、声を促すのは荒野のヤハウェとされるが、預言者はひたすら語られる。語るのではなく、咽喉のふるえに従いながらの舌の運動に委ねる。小刻みにふるえる咽喉もとに迫るものは、重層的でしかありえない塊りである。^{註6}

「五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっばいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分かれて現われ、ひとりびとりの上にとどまった」^{註7}

「舌のようなもの」が現われる。新約聖書のこの記述の意味することは深い。「語れ」と「舌のようなもの」が訪れて初めて伝道におもむく。確かにその人が語っているのだが、

街頭の聴衆には、「語れ」と命ずる、層となった塊りの存在が伝わっている、語られたことばは声の響きである。声を促すのは沈黙、幾重もの層となった塊りで、その事態を、福音をのべ伝えた初期キリスト教団の記述は見事に示している。^{註8}

何をいおうとしているのか。私は「ことば」に就くことを自覚する一人である。ことばとは何であるのか（漢字を用いず、あえてひら仮名表記にする）。声とことばの関係はどのようなものか。声とは、音とは何であるのか。ことばは意味と音との連なりだが、声は沈黙の破裂、存在のふるえ、耳を傾け、聴くこと事態のふるえに委ねるしかない。だから、ことばより声の領域の方が拡く、たえず深い。ことばは声の一部分に過ぎない。人が「語る」、そのとき声は誰が促すのか。長谷川忠一という、自ら「震災語り部」を名のりつづける人の孤独を遠くから考察し、おもいつくままのメモを試みた。語ることをひたすら促される、そのことを痛烈に自覚するところが、「震災語り部」を名のる他の方々との決定的な違いであり、孤独のゆえんである。^{註9}

いうまでもなく、長谷川忠一の震災一次資料は書かれたものだから、彼の行為を促すものをおもえば細部のうずき、一部分である。記録として刻みこまれたものよりも、おもわず放たれるため息や怒りの横顔などの表情、声になる前の苦しみの身振りのほうが重い。重層的な沈黙が部屋に残される。これまで、堪えに堪えてきた胸の奥の層に亀裂が入り、声が発せられる、それは永遠の一瞬のこのようだった。だが身振りも声も伏し目がちの表情もやがて深い沈黙に襲われる。沈黙を抱えた得体の知れない人、そんな感じで訪れた人が、いまや、重い記憶の荷物を一人ひとりの胸に残した。語るとは促し、語られるのだ、その原初の姿に接したときの驚き、この驚きをたいせつにせねば、私たちにはそうおもえたのである。

註

1、柳田國男は、文章を使用する以前の「語り部の時代、すなわち口から耳への感動」の期間を重要視する。新版『毎日の言葉』（角川ソフィア文庫）の赤坂憲雄の解説、「口から耳へと記録が引き継がれてゆく「語り部の時代」の主役が、ほかならぬ女性で「文字による歴史編纂の事業は、もっぱら男らの管轄下に置かれる」という指摘は「震災・まちのアーカイブ」の活動根拠を見事についている。

2、宮本隆司編集、映像作品『3・11 TSUNAMI 2011』（被災者撮影の津波映画と現場インタビューで構成）。昨年6月17日（日）、元町通の神戸風月堂ホールで作品公開後に宮本隆司、細見和之、筆者とシンポジウム開催。

3、『ゼバニヤ書』第一章

4、寺田寅彦や和辻哲郎の「天然の無常」を説く山折哲雄。

5、筆者の「超越者としての震災」（『災厄と身体』書誌山田、20～35頁）参照。

6、声と何かをめぐった岩成達也の最新著作『誤読の飛沫』（書肆山田）はアウグスティヌスをとりあげながら、ただ耳を傾けるしかない重層的な声、その声が突如外部から訪れる関係について考察する。

7、『使途行伝』第二章

8、瀬尾育生の『純粋言語論』（五柳書院）によれば、舌のふるえ（グロッソラリア、異言）は18世紀東欧のユダヤ人がハシディズムの集会の祈祷文を唱和するときに用いられた。グロッソラリアは初期大乘仏

教とネストリウス派キリスト教の出会いを通じ、法華経（あぬえ まぬえ まね ままね/ちって ちゃりて さめ さみた、というような意味不明の音声）にも流れこんでいると瀬尾育生はいう。人間の言語と事物の言語、自然との関係は、細見和之のベンヤミン論参照（『ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む一言葉と語りえぬもの』岩波書店）。

9、石牟礼道子には、音の精霊というおもいがある。おもいは、山がまだ山として、川や海がまだ荒々しく息づく八千万億年前にさかのぼる。「ものたちにはあの、音の精がかならずくっついていて、音の精のご先祖さまは、大昔の、阿蘇山や霧島山や、あの桜島の大噴火のようなものでした」（『あやとりの記』、ユダヤ・キリスト教的な考えとの違いは鮮明である。人間の地上の辛苦は、ものが発する音にくらべ「いさぎよはなか」、石牟礼道子こそ、残骸となって転がるものにまでいのちを視つめるほんものの語り部である。

【紹介】国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（ひなぎく）の公開が始まりました

東日本大震災に関するデジタルデータを一元的に検索・活用できるポータルサイト「国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（ひなぎく）」が国立国会図書館および総務省によって2013年3月7日より公開されました。

国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（ひなぎく）とは？

東日本大震災に関連する音声・動画、写真、ウェブ情報等を包括的に検索できるポータルサイト。2012年からの試験公開を経て、正式に公開されました。大学、報道機関、検索サイト等が収集している動画・写真や、神戸大学附属図書館震災文庫、国立国会図書館が所蔵する資料も検索可能。さらに、国立国会図書館が収集した国会原発事故調査委員会の映像や、被災自治体等の東日本大震災直後のホームページも見ることが出来ます。

URL ; <http://kn.ndl.go.jp>



東日本大震災アーカイブ（ひなぎく）トップページ

アーカイブ16年目の春

季村範江

2013年3月で私たちの活動は16年目をむかえる。

「震災・活動記録室」から引き継いだボランティア資料の整理から私たちの活動は始まった。私たちの周りで活動していた人やグループに資料提供を声かけ、徐々に資料は集まってきた。

年を重ねるごとに提供数は減少していったが、未だ大切に保存している人もどこかにいると考えられる。資料を手放す時は、活動を終えた時か保管していた資料を何かのきっかけで手放す決心をした時で、それがいつなのか予想がつかない。

2011年3月11日、東日本大震災が起きた。

惨状を伝える報道を見て震災当時の感覚を思い出し衝撃を受けた。長い間震災資料に関わってきた私たちに出来ることはないかと、遠い東北に思いをはせる日々を過ごしたが、きっかけがつかめず焦りにも似た気持ちを抱いていた。

そんな時に長谷川忠一さんの資料提供の話があった。長谷川さんは集めた資料を公的な機関に託すより、ゆくゆくは柴田和子さんに託したいとずっと考えていらしたそうで、資料は人と人の関わりの中で動いてゆくということをあらためて思った。

このことは私たちにもう一度活動の原点に立つことを教えてくれた。資料と取り組むということは長い時間を必要とすることで、今被災地とつながらなくても、いつかその時が来る。その時に備えて、どのような展開になってもいつでも対応出来るように、今までやってきたことを着実に続けることこそ必要なのではないかと考えるようになった。



事務所に運びこまれた長谷川氏の資料の入った段ボール箱

2012年5月20日、長谷川さんの資料がアーカイブ事務所にやってきた。中央区の復興公営住宅で暮らす長谷川さんのお宅は、17年間大切に保存していた資料が部屋にも廊下にも山積みだった。この日は資料移管の一回目として、ダンボール27箱を事務所に運び込んだ。

箱の中には、震災当時避難所だった行吉学園、ポートアイランドの仮設住宅、その間に始めた語り部ボランティア「グループ117」の活動の間に集まったミニコミ、さまざまな催しのチラシ、行政のお知らせ、全国からの手紙、写真など入っていた。

まず避難所の資料から取りかかることにした。アーカイブが今まで整理した資料はボランティアが残した記録が多く、被災者自身が残したものを扱うのはめずらしいことである。箱を開けて一つ一つ目録を取ってゆくが、資料だけから長谷川さんの声を聞くことは難しく、資料と資料の間を埋めるため長谷川さんから直接当時の話を聞くことにした。

震災に遭遇した一市民が何を見、何に怒り資料を残そうと思ったか、後世に何を伝えたかったか、これからじっくり話を聞いてゆこうと思う。

託された想い

柴田和子

一人の震災体験者が「身に起こる出来事を残さねば」と強い一念で震災以降の生活記録を残した。そして、その資料は、震災から継続的に活動し、震災の想いを受け継ごうとする震災・まちのアーカイブに託された。この両者のマッチングは、震災17年を経て可能になった。それがどのような経緯でなされたのか事の次第を記しておきたい。

長谷川忠一さんとお会いしたのは1995年5月、中央区避難所連絡会での席上だった。当時滋賀県から震災調査の為に度々神戸を訪れていた私は、避難所でのヒアリングを重ねるうちにこの連絡会において議事録づくりを担当するようになっていた。連絡会は、避難所のリーダーらが各避難所を孤立させずに問題を共有し、現状改善を図ることを願って自主的に結成したものであった。メンバーの中には、後に「1.17のつどい」実行委員長「神戸・市民交流会」代表となる中島正義さんやメンバーの神原実さん、仮設住宅の自治会長となる岡村幸義さんや岡正孝さん、浅沼昭彦さんなど、自ら被災しながらも被災者に尽力し、その後も震災と真正面から向き合い生活していくことになる人々が出席していた。長谷川さんもそういったメンバーの一人で、私は彼らと共に被災者による地道な復興活動を目の当たりにすることになる。

そんな彼らの活動を傍から見ていた折、長谷川さんから避難所開設当時のチラシやボランティアの日誌などを1枚も捨てずにダンボール4箱ほどにまとめて保管していることを告げられた。当時、私はひょんなことから兵庫県の外郭団体に勤務し、震災資料収集事業に携わるようになっていた。財団では、兵庫県全域から震災に関する一次資料を収集していた。そして、保存・公開する上で必要となる保管方法の検討や公開基準作りも合わせて行っていた。そのため勿怪の幸いと長谷川さんに財団における資料保存の安全性を説明し、委託することを勧めた。けれども長谷川さんは、たとえ保存に関する安全性が担保されたとしても、組織のメンバーが交代した後の資料の扱われ方は不明であるし、資料への思い入れまで引き継ぐことはできない、と、あくまで私個人に資料を託してそれを生かすことを望まれた。しかし、私にはダンボールに入った大量の資料とそれに付随する熱い想いを受け止める術がなく、明確な返事を何度も先伸ばしにしながら、結局、数年間が経過してしまっていた。

その間に長谷川さんは、別の形で被災地の想いを伝える手段を編み出していた。被災した人々と震災体験を語り継ぐ「語り部117」を立ち上げて、被災地外に直接赴く「出前語り

部」として講演活動を行うようになっていた。一方私は、兵庫県の外郭団体を辞めて、大学の非常勤講師として「ボランティア論」等を担当するようになった。長谷川さんとは、講義中に震災語り部として講演していただいたり、私が「語り部117」の一員として会合に出席したりして親交を深めた。私に子供が生まれてから子供好きの長谷川さんは、息子にとってかなり年の離れた友達となった。しかし月日が経つうちに長谷川さんは体調不良で通院することが多くなっていった。県外へ赴く出前語り部でも酸素ボンベを抱え、体力が落ちた体をようやく引きずりながら現地に赴いた。

このような病状の悪化による危機感から、懸案事項だった資料保存について再度相談を受け、私がようやく重い腰を上げたのは、震災から17年もたってからのことであった。これまでも資料の預け先候補として「語り部117」の顧問であった大学教授の元や大学図書館などが浮上したが、長谷川さんは頑として首を縦には降らなかつた。かといって、長谷川さんの想いを汲み取りながら資料整理を行うためには、私一人では荷が重すぎた。そのため、震災資料に対する方向性が同じで、資料整理の方法などを相談しながら取り組んでくれる仲間が必要であった。私は、震災資料収集事業に携わった頃から交流があり、災害の記憶・記録に人一倍こだわりを持ちながら熱心に活動をしているボランティア団体「震災・まちのアーカイブ」を候補に挙げ、長谷川さんに資料を預ける旨を承諾してもらえるように申し出た。すると長谷川さんは、資料については私のやりやすいようにしてもらえればと拍子抜けするほどあっさりとして資料の寄贈を承諾してくれた。そして私は、早速震災・まちのアーカイブに相談を持ちかけた。

その後の震災・まちのアーカイブの行動は迅速で、長谷川さんの自宅を訪れ、車による資料の運び出しが行われた。その資料は、長谷川さんの17年間の生き様と共に、避難所時代のダンボール4箱からいつしか20箱以上を超える量に膨れ上がっていた。私は想像していた以上の箱の量に驚愕したが、これは本人が震災体験を常に記憶しようと思ってきたことの査証でもあると思うと、これまで先延ばしにしていたことへの贖罪の意識が芽生えた。ともかく本人と共に幾度もの引っ越しに耐えてきた資料は、ここにきてやっと安住の地を得たのだ。しかし、この想いの強い資料をどう整理すればよいのか。箱に入っている資料は、主に災害時の避難所資料、仮設住宅関連資料、語り部ボランティアの資料に分類できる。しかし、それ以上にこの震災資料は、震災により人生の方向転換を余儀なくされた一個人の貴重な生きた記録である。この資料には内容分類では捉えきれない貫した託された想いがあるはずなのだ。それを知る為には本人へのインタビューを重ねる中で、それを汲み取りながら資料履歴を作成する必要があるだろう。このような資料保存とご本人の気持ちの整理も付ける作業を震災・まちのアーカイブのメンバーとともにこれから知恵を出しながらじっくりと取り組んでいきたいと思う。



番号が付けられた段ボール箱

【新刊案内】

災厄と身体 破局と破局の間から

著者 季村 敏夫

書肆山田

今、私たちは何をもうべきなのか。何をもうのか。
 災禍と惨事の狭間に身を置くより術のない者として。
 偶然、生きて在る者として。
 「いたましきこと」に目を閉ざすことができぬまま。



2012年10月25日発行 144ページ

定価 1890円 (本体 1800円) ISBN978-4-87995-858-7

活動日誌

2012年

- 4月28日(土) 『瓦版なまず27号』印刷・発送 於；事務所
- 5月20日(日) 長谷川忠一氏資料受け入れ 於；神戸市中央区、事務所
- 6月10日(日) 長谷川氏資料の整理方法検討 於；事務所
- 6月17日(日) シンポジウム「震災後の表現—神戸から東北—」 於；神戸風月堂
- 6月30日(日) 長谷川忠一氏資料の整理 於；事務所
- 7月15日(日) 長谷川忠一氏資料の整理 於；事務所
- 8月13日(月) 長谷川忠一氏資料の整理 於；事務所
- 9月15日(土) 長谷川忠一氏資料の整理 於；事務所
- 10月8日(月) 長谷川忠一氏資料の整理 於；事務所
- 10月28日(日) 長谷川忠一氏から聞き取り 於；事務所
- 11月18日(日) 長谷川忠一氏資料目録確認 於；事務所
- 12月16日(日) 長谷川忠一氏から聞き取り 於；事務所

2013年

- 1月20日(日) 長谷川忠一氏資料群及び『瓦版なまず28号』について話し合い 於；事務所
- 2月17日(日) 『瓦版なまず28号』編集会議 於；事務所
- 3月10日(日) 長谷川忠一氏から聞き取り及び『瓦版なまず28号』編集会議 於；事務所
- 4月6日(日) 『瓦版なまず28号』編集会議 於；事務所

編集後記

東日本大震災から2年たちました。阪神・淡路大震災を経験した地で何があったのか、改めて問い直されています。この一年、長谷川さんの資料を整理し、直接お話を聞きしてきました。今回は、「語り部グループ117」のお話をまとめました。一被災者の目線からのお話を残す、資料の整理とともに今後も続けていきたいと思います。



瓦版なまず

第3期第5号 (通巻29号)

編集人: 佐々木和子

発行人: 季村 範江

震災・まちのアーカイブ

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 Phone : 078-681-6231 Fax : 078-681-6232

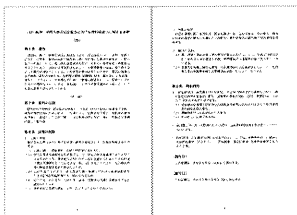
12年前の懸念

佐々木和子

震災資料は、現代を切り取る資料である。そのため、資料を公開するためには、個人情報やプライバシーへの配慮など、「公開基準」と呼ばれるいくつかの配慮が必要となってくる。しかし、これらは、年を経るとともに、守るべき対象やその関係者がいなくなったりするので、いつまでも必要なわけではない。

約12年前、兵庫県は、大規模震災資料所在調査事業をおこなった。当時事業を担当した阪神・淡路大震災記念協会（以下、記念協会）は、事業開始直前の2000年5月に「資料取扱いに関する要綱」（以下要綱）を作成した。この中では、「公開が基本」、「資料提供者の意思の尊重」の原則に基づき、各地の情報公開条例、個人情報保護条例を参照し、次のような公開制限条項を定めた。「寄贈者等と特約があるもの」や「特定の個人が識別され得るもののうち、通常他人に知られたいくないものと認められるもの」、「特定の個人を識別することはできないが、公にすることにより、なお個人の権利を害するおそれのあるもの」、「公にすることにより、円滑な事業活動」を妨げるものなどである。一方、自分が関与する情報についての開示請求権を認め、作成または收受後一〇年後に公開制限の見直しをおこなうものとした。さらに、設置目的に沿った調査・研究のためには特別利用の道を開くことや、資料の取扱いや利用制限への苦情申立てについて諮問する専門委員会の設置を定めた。

大規模調査では、この要綱には記載されなかったが、資料の取り扱いをめぐって、「別途協議」という文言が用いられた。これは、実際資料提供者に説明をおこなう調査員が、それまで資料調査や取扱いの経験のない6か月雇用の方々だったため、詳細な説明が必要とする、またそれを求める提供者に対しては、協会側が、「別途協議」の扱いをすすめた。当然、別途協議資料には、提供者の思いのこもった貴重な内容のものが多く含まれた。2002年4月、人と防災未来センターが開館し、記念協会の収集した資料は、人と防災未来センター資料室（以下、センター資料室）に移管された。



「資料取扱いに関する要綱」

「別途協議」とは、仮目録を作成した上で、今後協議が必要とされたものである。協議をおこなうためには、資料を専門に取り扱う機関、専門家の存在が前提だった。その専門家から、今後の取り扱いについて丁寧な説明を受け、協議の結果、記念協会の後継施設である取り扱いを「一任」、「利用の都度協議」となるものに分けられるものである。

ところが、センター資料室開室10年を経た2012年、「別途協議資料約5万点」と、「公開する場合事前に寄贈者に連絡する」「寄贈者不明で対応に苦慮」との記事が掲載された(神戸新聞2012年11月13日付)。記事からは、「別途協議」資料とは、「公開申請があればその都度、寄贈者の了解を得る」資料と理解されていることがわかった。元来、「対応に苦慮」するような問題には、「専門委員会の設置」(要綱第10条)が定められているにもかかわらず、専門委員会のような機関は活用されていなかった。

2002年3月、記念協会は、『「震災資料の保存・利用、及び活用方策研究会」報告書』を刊行した。この報告書は、記念協会で研究会を開催し、検討してきた資料をめぐる活動成果が、人と防災未来センターに継承されることを願って作成されたものである。そこには、「センターの資料部門が、これまでに培われた資料事業の経験や能力を継承し、その役割を果たしえるかどうか懸念される」と記された。資料室が独立した組織にならず、専門研究員の配置ではなく、非常勤の専門員しか配置されなかったことからの懸念の表明であった。のちに専門員は、3年間との有期限雇用となり、ますます活動の継承が困難となっている。東日本大震災の発災後、阪神・淡路大震災での経験の発信は、ますます必要となっている。12年前、研究会がいただいた懸念は、払しょくされていない。



【写真】『「震災資料の保存・利用、及び活用方策研究会」報告書』

厄介者

水本有香

震災資料の整理をしたり、震災の体験をお聞きすることがある。それはすべて誰かの記録や誰かの想いである。

しかし、私が「これだけは」と思い、人と防災未来センター(以下、「センター」)へ託した資料がある。それは2003年に亡くなった父のものである。父は阪神・淡路大震災の時、母とたまたま姪の結婚式に出席するため、東京におり難を逃れた。父が勤めていた会社の震災誌の文中には「復旧のキーマンとなる水本と連絡が取れない」とある。両親は震災当日、電話が通じない中、



【写真】壊れた自宅

関西国際空港へ降り立ち、車で西宮まで、西宮からは自転車神戸を目指す。真っ暗な中、全壊した家にたどり着いたが、子の姿はどこにもなかった。翌日、神戸市東灘区の浜側のLPGガスタンクのガス漏れによる火災・爆発の危険からの退避中、ばったりと出会い、大阪の叔父宅に私たちを避難させてから、父は工場復旧のために会社の寮に泊り込み続けた。

その資料とは、被災した工場の復旧に関する記録である。父が入院する直前、震災復旧した様々な工場について調べることがあり、父に尋ねたところ自分の資料を渡された。親子関係は世間的に悪いものではなかったと思うが、夜間高校に行きながら15歳から働き続けてきた父にとって、いつまでも定職に就かず、反対したのに大学院へ進んだ娘をよしとしない雰囲気があった。

父の命はそう長くないことを知り、ずるずると資料を返しそびれた。この資料は家にあっても捨てられてしまうかもしれない。その時、私はセンター資料室におり、「セン

ターならば資料は捨てられず、いつか、誰かの役に立つこともあるかもしれない」。そして、何よりも父の名前が震災資料のデータベースに残ればと思い、資料を寄贈した。

近頃、センターからこの資料の公開に関する条件の変更を依頼する旨の手紙が届いた。今の公開条件のままでは、センターで資料を活用することが難しいようである。本当にそうなのだろうか。分からないが、あの資料は誰かの役に立つどころか、ただの厄介者になっているのか。

震災資料は大量にある。確かに、写真や地図のように分かりやすい、使いやすい資料もあれば、父の資料のような「いつ役に立つの？」というものもある。今、すぐには使えないかもしれないが、何もなくなってしまえばなかったことになってしまいかねない。いつか、誰かが、私が想像もしないような目的や価値観の違う使い方資料と出会い、厄介者が厄介者ではない日が来るかもしれない。私ができること、すべきことは何か、逡巡している。

トーク・セッション『記録をつなぐ 一 災厄の現場から』参加記

市村登和

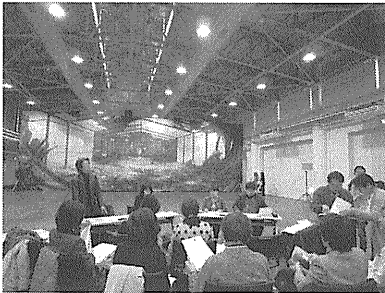
平成26年1月13日(月)に、新港突堤の入り口に位置するデザイン・クリエイティブセンター神戸 KII+0 (旧神戸市立生糸検査所) で、トーク・セッション『記録をつなぐ 一 災厄の現場から』が催された。

前日同じ会場で開かれた高村薫氏と赤坂憲雄氏との対談には200余の人々が集まったとのこと。果たしてこちらの小さな集まりはどれくらいになるのか。ごく少ない人数になるのでは。だから前日と同じ会場ではなく小さな会場をセッティングしてもら

いたいのだが、との希望を運営者側に働きかけた。が、希望叶わず、前日と同じ大ホールでの開催となる。天井も高く、広さ・大きさを感じるホールの中央部分で、報告者との距離を近くするため、対面ではなく円座に近い配置で椅子が準備される。マイクなし。加川広重氏作の2枚の巨大絵画鑑賞の人が次々とホールに入ってくる。そのど真ん中で、十数名が集まった。全体の大きな流れの中にある、小さな集まり。ポツンとその集いがあることを感じさせるに必

要十分な巨大な空間。だが、それは人数に見合う小さな会場で開催するよりもずっと今の震災・まちのアーカイブらしい開催風景ではなかったか。大きな流れには流されずに活動を続けてきたことを象徴しているかのような対比が、ホールに出来ていた。

あるいは、この対比は、東日本大震災において、メンバー一人ひとりの活動は活動をしてはいるけれど、「大地震」「津波」あるいは「原発」「フクシマ」という事象に、震災・まちのアーカイブというグループとして開かれた場で関わるのが震災以来はじめてだったことにも起因するのではないか。地道に、できる範囲で、しかし、続けられる限り活動をしていく。それができることであるのかもしれないが、以前に試みたような開かれた場へ一歩踏み出すこと、他者と交わることをグループとしてできていなかった末であるまいか。



【写真】トーク・セッションの様子

そういう意味では、柴田さんと佐々木さんという阪神・淡路大震災での小さな声に関わってきた二つの報告の間に川内淳史さんが加わったことで、今回のセッションに、東北と神戸という震災についての関わりの複層性が生まれたのでは、と思う。しかも川内さんは、死者という当事者、その当事者に直接深く関わる人々、「ではない」辺縁に立っている。津波の被害を直接受けていない青森のどちらかと言えば日本海側が出身地、東日本大震災時は関西にて生活を

しているが、研究のテーマは東北近現代史という立ち位置。阪神・淡路大震災の時は、大人でも無邪気な子供でもない中学生で、東京のまだずっと向うで起こった震災に関わる術はなかった。そのようなバックグラウンドを持ちながら他の研究者と交わるうちに、今は「生存の歴史学」という新たな視点で研究を続けているという。二つの震災について、どちらについても、その辺縁に自分の立ち位置を置かざるをえない。声を上げない人が立つ、声をあげようにも届けられない、その立ち位置に居ざるをえない人と、似通ってはいないだろうか。

神戸市でも、約半数が震災後に転居してきた人と聞く。震災後に生まれた人は0歳から19歳まで20年間分いる。これらの人々も阪神・淡路大震災に全く関わりなく生きていくことはできないだろう。だが、どうかかわればいいのか。声はないのか、あるのか。問われることはないのか。東日本大震災以後は、東北での出来事も重ねられての問いを受けるだろう。あるいは、これらの人々、特に、震災後に生まれて大人になろうとしている、これからの人生の若者の小さな声を拾い上げるようなことを考えなくてもいいのだろうか。

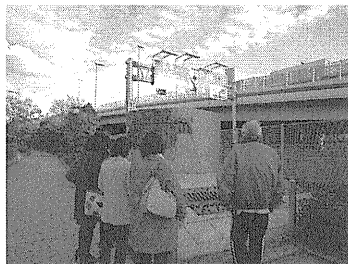
もしかすると、その実践をしてきたのが、最初に報告した柴田和子さんなのかもしれない。被災という非日常下で作られた当初からの関係資料を捨てずに残そうとした長谷川忠一さんの志にまず心底感心するのだが、長谷川さんは、残り集めていた避難所資料と語り部関連資料を一個人「柴田和子」に託す、と心に決める。柴田さんからすれば、長谷川さんの心に決められる。そして、その思いを反らさず今日まで長谷川さんとの交流を続けてきた。柴田さんは直接的な被災者ではない。地震が起きたときは滋賀県在住の大学院生だった。辺縁に立つ若者だった。被災地からの要請を受けてあるい

は大人から指示されて神戸に向かったのではなかった。柴田さんは、「託された使命が私にはあるのだ」という大上段なところはまったくない。それでいて、一度つながった縁は、学生から社会人になろうと、住む場所が変わろうと、家族が増えようと、変えることなくつなげている。一度つなげれば立ち去ることがない。ブレがない。辺縁に立ちながら、しかし、長谷川さんの闘いに、耳を、身体を、心を寄せ続けている。当日、その報告を長谷川さんが聴いていた。

最後の報告者が佐々木和子さんだった。アーカイブ設立時の思いを改めて振り返りながら、公費解体という事例で、小さな声の取り上げられ方、取り上げられなさ、を報告した。時間切れで多くの議論ができなかったことが残念である。

私たちは、季村さん夫妻と別れ、長谷川忠一さんも一緒に帰路に着いた。税関前交

差点のところで、この少し西に被災した道路橋脚が保存されているので案内しようかと長谷川さんが言う。立ち止まった私たちの中で、まず柴田さんが一歩西に進み、「皆さん、行きましょう、寄ってみましょう！」と、実際に、にこやかに私たちを誘った。これだ、と思った。これなのだ！この心持ちをわたしは持ち続けているだろうか。



【写真】保存された阪神高速道路の橋脚

※イベントの内容については、後日、冊子化、発行予定
(2014年4月)

資料整理記

震災・まちのアーカイブは、柴田和子さんを通じて長谷川忠一さんに出会い、長谷川さんの資料に出会うことになった。搬出の日、長谷川さんの資料は長谷川さんのご自宅の一部屋と廊下を占拠しており、私たちを出迎えてくれた。長谷川さんの資料群は、主に、長谷川さんが避難所にいた時期（避難所期）、仮設住宅にいた時期（仮設住宅期）、「語り部グループ117」の時期（語り部期）、さらにそれぞれの時期に撮影された大量の写真ネガに分けることができる。



【写真】長谷川さんの資料（ご自宅保存時）

アーカイブの事務所に資料が入った箱を運び込み、いざ箱を開けてみる。箱は20箱以上ある。箱の中身は色々なもの、同一の資料が複数あるもの、作成時期がバラバラに入られている。これは資料整理するに際し、メンバー間で方針を話し合う必要があると判断した。話し合いの結果、まず、箱の中身が避難所期、仮設住宅期を含む箱を先に整理し始める。私が担当した箱（箱番号1）には「実施献立表平成7年5月1日～平成7年5月7日」というタイトルの資料。避難所に配達されていたお弁当の献立のようである。「高齢

者・障害者向け地域型仮設住宅（応急仮設住宅）入居申込のごあんない」、「第3次募集仮設住宅（神戸市内）リスト」は長谷川さんが避難所から仮設住宅へ移る前に受け取った資料だろうか。資料を次々としてみると、「第6仮設住宅の皆さんへ」、「ポー愛ふれ愛秋祭り チラシ」という仮設住宅期の資料が出てくる。

長谷川さんの資料は阪神・淡路大震災の後、長谷川さんが歩んできた、神戸が歩んできた時間が詰まっている。自分も同時期に同じような場所にいたはずなのに、知らなかったことばかりである。

資料の背景を知るため、私たちは長谷川さんに当時のお話を聞き取りも行っている。阪神・淡路大震災からもうすぐ20年。知られていない震災はまだ沢山あるのではないのか。いや、知られていない震災の方が多いのではないのか。長谷川さんのお宅にも事務所にも箱が大量にある。知られていない震災を保存するため、長谷川さんの資料整理は続く。（水本有香）

小さな声

藤原直子

原稿を書き直すため、机に向かっている。外は春の雨、ラジオから流れてきたニュースに、気持ちが暗くなる。東日本大震災から3年経ち、被災地での自殺者が増えているという。その増え方は、特に福島が顕著であるとも、伝えている。

私たち、震災・まちのアーカイブのメンバーであった木内寛子さんは、神戸で地震に遭った後、被災者として生きて行かなければならなかった日々のことを、こう書き記している。「この地震は、私にとって、渦の中にいた、はじめての体験だった。わたしは、ということの言いにくさ。違和とありにくい空気を感じていた」。そして、「いまも地震と関わっているのは、十把一絡げにされそうになった、されてしまった、あのころ報道などによって醸された勢いに対する、うらみ、であると思っている」と。ラジオのニュースを聞きながら、木内さんの言葉を、思い起こしている。

被災者と呼ばれて、この3年間、東北の人たちは、どのように生きてきたのだろうか。「わたしは、」という、それから先の言葉を、誰かに告げることができたのだろうか。大きな声にかき消され、小さな声が届いてこない。震災を生き伸びて、命を絶つ前に、あなたは、「わたしは、」と、語ることができましたか。

阪神・淡路大震災から19年、私は今も神戸に通い続けている。被災地と呼ばれた、土地に生きた人々の、小さな声でつぶやかれた、「わたしは、」は、資料の中に、私の記憶の中に残っている。そして、あれから19年経った今も、この地でのつぶやきは聞こえてくる。さらに、小さな声となって。

大きな声にかき消されそうな、小さな声に耳を傾けたいと思う。木内さんが、被災の後、感じた生きにくさを忘れてはいけないと思う。亡くなった木内さんの小さな声が、私の思いを東北へと運んでいる。

へろへろということ

季村敏夫

「一生活者を自負しながら、社会の観察者に留まって行動しない作家に、いったいどんな理があるか。この一、二年ずっと自問し続けている。」(連載「作家的覚書」第2回)

これは、高村薫さんの随想の最終箇所である。タイトルは「ものを言うこと、行動すること」(『図書』2014年2月号)。千字ほどの短い随想、その最終に来るまで、「政治」という言葉が八回、「観察」が四回選ばれ、途中「逃げざるをえない」と書かれている。いったい何から逃れようとしていたのか。

一月神戸で開催された赤坂憲雄さんと高村薫さんとの対談(「東北の復興、福島の復興と日本の明日」)。一語一語を確かめるように慎重に放たれる高村さんのたたずまい、会場の片隅のわたしに確実に届いた。

それから約一か月後、東京都知事選挙の結果に落胆していた朝。細川元総理への票が予想外に伸びていない。ひきかえ、防災国防を訴えた帝国軍人の再来とっていい人への票が予測以上にあった。これが現実、受けとめねば、スイッチをきりかえ職場に向かった。

おもいだすことがある。昨年十月、さる銀行の支店長がこうわたしにいった。「小泉純一郎さんの反原発、じつは評判はもう一つ。過日も彼の講演会を企画しましたが、原発の話になるとしんど会場は静まった。経済人はアベノミクスに乗りたいたいです」。「女性経営者も少なくなかったのですよ」。聞いていたわたしは暗くなった。経済第一線を生きるかたがたは、とどのつまりこうなのかと。あの原発事故、荒れ狂う津波の映像、カタストロフィーを示されても、ついにわたしたちは変わることはないのかと。

さて高村薫さんだが、赤坂憲雄さんとの対談でこう語った。名古屋地区(史上空前の利益を計上する某多国籍企業の牙城)のある場所で講演したとき、参加した男性は妙に静まりかえていた。そのとき、一人の女性が立ち上がり高村さんに意見を述べはじめたというのである。秋にグローバリズム最前線の支店長から聞いた話、今年1月の高村さんの話、東京都知事選の結果、すべてどこかでつながっている。

片隅からの観察。その位置に執することも行為である。こうわたしは考える。だが高村さんは、観察から一歩身を乗り出す。「どんな理があるのか」。高村さんのこの問いは「政治」から「逃げる」「逃げない」という葛藤と対になって発せられ、大切である。言葉と格闘、書くことの密室作業、しかしそこに自己充足することをゆるさない。なにかが促すのだろう。高村さんを強く促すものを、言葉に携わる端くれとして、わたしなりに背負いこもうと試みる。あやまつてもよい、間違いをおそれず一歩踏みこむこと。踏み入ることから逃れないこと。そして、いかなる事態に遭遇しても硬直せず、「へろへろ」対応する誠実、わたしはそう学びとった。*

*「へろへろ」は中野重治から発せられた。鶴見太郎『座談の思想』(新潮選書)のなかの「感情と内省—中野重治の誠実」を読み、心が洗われる。「つまり、武器ってものをこういう硬いものだとすると、もうへろへろのがね、武器だったり、力を発揮するんだからね」。小野十三郎に応えた中野重治の発言の一部である。「へろへろ」、こう平然といえる思想の幅は広く深い。カタストロフィー以後の精神の栄養素になる。あなたも『座談の思想』の声に耳を澄ませて欲しい。こんな句があった。「へろへろとワントンするクリスマス」秋元不死男。

【新刊案内】



歴史文化を大災害から守る 地域歴史資料学の構築

奥村 弘 編 東京大学出版会

ISBN978-4-13-020152-0. 発売日:2014年01月下旬, 判型:A5, 462頁

内容紹介

日本列島において続発する大規模自然災害によって、地域の文化、記憶を支える史料群は失われる危険性にさらされている。本書は全国にネットワークをつくり、大災害時に歴史資料を守る基盤をいかに平常時に築いていけばいいのか、これまでの実践をふまえて次世代に向けて提案する。

活動日誌

2013年

- 4月14日(日)『瓦版なまず28号』印刷、発送 於;事務所
 5月19日(日)今後の活動についての検討 於;事務所
 6月9日(日)長谷川忠一氏宅より8箱(紙、写真資料)搬出 於;神戸市中央区、事務所
 6月30日(日)長谷川氏の資料整理の方針検討 於;事務所
 7月14日(日)長谷川氏資料の整理方針の検討 於;事務所
 10月14日(月・祝)長谷川氏から避難所・仮設住宅のお話聞き取り 於;事務所
 11月10日(日)長谷川氏の写真資料の整理方針検討 於;事務所
 11月30日(土)2014年1月13日のイベント打合せ 於;梅田
 12月14日(土)2014年1月13日のイベントおよび長谷川氏の写真ネガ資料の処理について検討 於;事務所

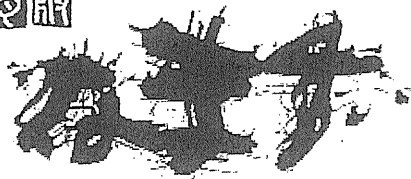
12月22日(日)2014年1月13日のイベント打合せ 於;西宮市市民交流センター

2014年

- 1月13日(月・祝)トーク・セッション『記録をつなぐー災厄の現場から』 於;デザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)
 2月9日(日)『瓦版なまず29号』、1月13日のトーク・セッションの冊子化検討 於;事務所
 3月9日(日)『瓦版なまず29号』、1月13日のトーク・セッションの冊子化検討 於;事務所
 3月30日(日)『瓦版なまず29号』印刷、発送 於;事務所

編集後記

久しぶりに震災・まちのアーカイブがイベントを開催しました。イベント終了後、新入りの私が震災・まちのアーカイブ昔話の一端を皆さんから伺って実感したのは、意外とこのグループの誕生秘話(?)の聞き取りなどは残していないので、きちんと記録を残しておきたいなあ、ということでした。(み)



震災・まちのアーカイブ

〒653-0022 神戸市長田区京尻池町 1-11-4 Phone: 078-681-6231 Fax: 078-681-6232

福 島 へ



季村敏夫

大門正克さま

その後、おかわりありませんか。あの日神戸で開かれたフォーラム「小さな声をつなぐ」に来ていただき、短いひとときでしたが、あとで忌憚のない感想を寄せていただいてから、もう1年以上経ってしまいました。

今朝たまたま、机の周囲を見ていたら、大門さんから今年いただいた賀状がありました。現れ出たような感じでした。ふしぎです。そこに、「2015年は福島と神戸を考えます」、こう書かれていて、ぼくは不意をつかれました。

ちょうど瓦版『なまず』の編集部から原稿依頼があり、依頼状にあった、「震災20年を経て、福島につながる中で、記録と記憶を考え続ける一歩にしたい」、この箇所に違和感を抱き、福島につながることの出来ない自分を抱え、立ち止まっていたからです。でもこの偶然、なんとかたいせつにしたい、このおもいに促され、突然お手紙さしあげます。

今年1月、福島の飯館村の現状を聞く集いが神戸でありました。開催前、集いを企画した島田誠さんから、被災地神戸から何か発言して欲しいと依頼されました。でもぼくは、引き受けることが出来ませんでした。島田さんには、「福島に拮抗する言葉を持っていません。この自覚のない言動はおこがましい。いったん口を封じ、耳でお迎えする方法はないのでしょうか」、こう伝えました。伝えましたが、つながることが出来ないことに自足してはいないか、後で苦しみました。

地震による家屋全壊という体験がぼくにあって、すでに20年、結局は安穩に生き延びてきました。こういうものいいをゆるすのは、やましさというか、あざとさも含め、裏切りというべきか、挫折を強いられてもどこかで何かをごまかし、たいせつな問題を跨ぎ越し、記憶さえ薄めてきた自分の場所の居心地の悪さに、ぼくなり気づいているからです。居心地の悪さ、ここにある「悪」という一字、ぼくは抱えざるを得ません。しかし、こうまで明らかにすると、片すみの声は一層孤立します。

ところが、あの日の死者はそうはありえない。いまなお、渦中にあります。津波でいまだ行方不明の隣人を抱く方々も、記憶を薄めることなどありません。惨禍の渦中にあります。放射性物質の飛散に襲われ、野垂れ死んだ牛馬を抱え途方に暮れるひと、転居や別居、老人の自裁、あの日以降うって変わった姿を強いられる方々も同様だと存じます。ひきかえ神戸のぼくは、いまや燦々とした陽ざしを浴び、鳥のさえずり、子どもたちの明るい歓声に日々包まれ、なにごともしなかったかのごとく生きています。渦中といっても、記憶の濃度を薄めた渦中に墮ちています。いまだ呻きつづける方々との落差、これをどうすればよいのか。自分のなかのこずるさを視つめながら、福島に拮抗できる発想をどう培うのか、これはいわば、初発の意思です。

そういうわけで、『なまず』編集部には、「福島につながる」ことを自明にしないでいただきたい。「つながる」ことより「離れる」こと、距離のなかでの思考でなにごとか目覚めるものを待つ、そのことがたいせつではないのか。とりあえずこう応えました。そのあくる日、大門さんの賀状が現れ出たわけです。

大門さん、この1月、飯館村で農業に携わる方と、身の丈の記憶を考える「いいたてまでの会」に関わる方の眼前にぼくは居ました。お二人の一言ひとこと、そのたまたまい、眼光が、容赦なくぼくをうってきました。居心地の悪さなどすつ飛ぶようでした。災厄の後の福島を包む陽ざし、さえずり、子どもたちの歓声が、事後的に押し寄せるのを感じました。現状の報告を終え、二人は、「このような出会いの場を設けていただき、ありがとうございます」、こうおっしゃいました。それまで、耳になっていたぼくは、「それは違う。ありがたいおもいに包まれるのは、在り得ない悲惨が勃発した福島から、遠いところで生きる安穩さが問われるぼくらの方だ」、とっさにおもい、そのことを発言してしまいました。耳となって座りつづけることから、おもわず一歩、踏み出てしまいました。それまでの居心地の悪さは、どこにいったのでしょうか。あつというまの出来事でした。

ありえない破局のなかの陽ざし、まさにそれはありえない陽光で、ぼくらの言葉だけの陽ざしはいっきよに崩れます。その崩れは今なお進行形です。そういうなか、今度はぼくらが伺います。福島現場を案内していただきたい、やつと姿勢が定まり、7月初旬の福島訪問が決まりました。啓示のような陽ざしのなか、しかし、言葉を繰り出したくはない、繰り出せないという場から、気づけば一歩飛び出していた。身体の飛躍、身体の言葉の誕生と呼べばよいのでしょうか、神戸から福島、福島から神戸、落差を埋める思考の往還を、まさに自分のあざとい現在の時間をさらすことにより課そうとおもいます。

今朝不意に現れた大門さんからの便り、この偶然には、何か、導きのような促しがひそんでいような気がして仕方ありません。お手紙したゆえんです。

2015年4月22日

神戸から 季村敏夫

聞き取りにくい小さな声に耳をすます——2015年 福島と神戸——

大門正克

2015年2月28日と3月1日、1年余りの準備をへて、福島市で福島フォーラム「歴史から見つめ直す「生存」の場——分断を越えて」を開いた。3.11後、原発や放射能をめぐる福島の分断状況は思っていた以上に厳しく、福島フォーラムの開催が暗礁に乗り上げる時期もあったが、さまざまな人と意見交換を重ね、開催にこぎつけることができた。福島フォーラムには、全国や福島県内から70名が参加した。

3.11後の2011年秋から、3.11をめぐる問題を歴史と現在の往還のなかで考えるフォーラムを開催できないか模索を重ねてきた。2012年2月、声をかけあってきた7名が大阪に集まった。

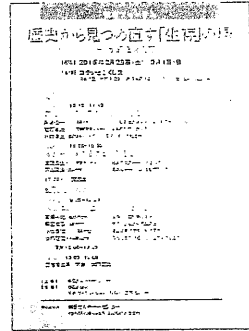
東北の近現代史を研究する岡田知弘、川内淳史、河西英通、高岡裕之と私、編集者の角田三佳、朝日カルチャーセンターの石井勤の7名である。

この集まりで石井は、フォーラム開催の意義を次の4点で述べた。①「生存の歴史学」によって東北の歴史と現実を描き直す、②生存をキーワードに東北とこの国全体のあるべき姿を問い直す、③東北をキーワードに歴史学のあり方を問い直す、④講座の記録化。以後、石井の提言にいくたびとなく戻りながら、試行錯誤を重ねつつ、歴史の側から被災と復興を考えるフォーラムを開催してきた。

2012年4月から6月にかけて、まず、東京の新宿で「「生存」の歴史を掘り起こす——東北から問う近代120年」を開催し、ついで2012年8月に宮城県気仙沼市において気仙沼フォーラム「歴史から築く「生存」の足場——東北の近代120年と災害・復興」、2013年9月には岩手県陸前高田市で陸前高田フォーラム「歴史が照らす「生存」の仕組み——3・11災害後のいのち・暮らし・地域文化」を開いた。この間、2013年5月には、大門正克・岡田知弘・川内淳史・河西英通・高岡裕之の編『「生存」の東北史——歴史から問う3・11』(大月書店)を発刊し、石井の言う④の一端を実現した。

宮城県、岩手県と続けてきたフォーラムの次の課題は福島県で開催することだった。宮城県、岩手県では津波が大きな問題だったのに対して、福島県では、いうまでもなく原発災害と放射能の問題があった。2014年2月から準備をはじめ、紆余曲折をへて福島フォーラムの開催の見通しがどうにかたち、テーマが定まったのは2014年9月のことだった。それ以来、私はフォーラムでの自分の報告の準備を始めた。

私自身は、今まで福島の歴史について研究したことはなく、この機に福島の歴史を調べ、原発災害と放射能の被害についても多くの本を読んだ。だが、いくら調べても勉強の域を出ず、私はその話を報告しても外在的な指摘にとどまるように思えた。原発災害や放射能の被害はきわめて重要な検討課題なのだが、そのことを話すだけでは、何よりも私たちがフォーラムで掲げてきた「生存」に立脚することができないように思えた。人びとが生きること、生きることの仕組みにかかわる「生存」の視点から福島の歴史と現在について考え、さらに「分断を越えるために」はどうしたらいいのか、模索の日々が続いた。



2015年に入り、曲折の末に私が選んだのは、次の2つの視点をふまえることだった。1つは、3.11以後、福島を中心にして書かれた手記、記録、聞き書きなどを読み、人びとの声に耳を傾けることである。

もう1つは、原発・放射能の問題と津波の問題を分断しないことだった。言い換えれば、私たちが宮城・岩手を通して考えてきたことをふまえて福島の問題を考えることである。原発・放射能の問題と津波の問題には、当然に異なる面があり、福島のなかからは、「津波であればその後の復興を考えることができるが、津波と原発は違う」という声も聞こえていた。だが、仮に津波と原発をこのように分けてしまうと、そこでも分断がつくりだされることになってしまわないか。分断を越えるためにも、私たちのフォーラムの蓄積をいかす必要があると思えたのである。

2つの視点をふまえて、以下のものを集中して読んだ。手記(『世界別冊 破局の後を生きる』、金菱清編『3・11 慟哭の記録』新曜社)、放送記録(NHK東日本大震災プロジェクト『証言記録東日本大震災』I・II、NHK出版)、聞き書き(東京財団×共存の森ネットワーク『被災地の聞き書き101 暮らしを語り、思いをつなぐ』東京財団)、福島の被災者の声を伝えるHP(「かすかだりの会」<http://madeinataiwa.jimdo.com/>)、「飯館村 1人1人の思い 伝えたいメッセージ」<http://itatemessage.jimdo.com/>)、トークセッションの記録(渡辺一枝編『福島の声を聞こう! 3.11後を生き抜く7人の証言』オフィスエム)などである。

これらのなかで印象に残ったことをいくつか紹介したい。手記や聞き書きといっても、そこに率直な声が必要で、必ず書かれているわけではない。まとめ方次第で、一人ひとりの声が届いてくるものもあれば、届かないものもあった。

『3・11 慟哭の記録』は、東北学院大学の教員が学生とプロジェクトチームをつくり、学生の震災レポート500件を集め、そこから地域・職業・階層・性別・年齢などを考慮して、学生の親族・知人、大学の卒業生などに手記を依頼したものだった。テーマを選択してもらう以外に制約のない手記からは、率直な吐露や軋みの思いが聞こえてくる場合があった。

たとえば、福島県大熊町出身の橋塚子(仮名)はサバンナの大草原は、原発災害後の2011年7月に一時黒化したときのことを書いたものであり、そこには、「そしてふと思う。なんで自分は今ここにいるのか。なんでこんなバスに乗っているのか」といった言葉に続けて、「この思いが誰にわかるというのか。むしろ、わかってたまるかという感じだ」という率直な言葉が書きとめられていた。

それに対して、『被災地の聞き書き101 暮らしを語り、思いをつなぐ』は、宮城県、岩手県での聞き書きをまとめたものであり、福島県は含まれていなかったが、先の『3・11 慟哭の記録』とくらべた場合、文章のまとめ方が対照的であり、その点が大変に気になった。

ここには、聞き書きの指導者のもとで、社会人・学生が被災地の人の「人生、普段の暮らし」について2時間聞いた聞き書きがまとめられていた。聞き手を消した語り手の一人称のスタイルに、「震災から見事立ちあがった 素晴らしい町って言わせたい」「仲間の強さを感じられたな」「前を向く、それを支えていく」といったタイトルがつけられた文章からは、一人ひとりの逡巡や不安を聞き取ることは難しく、困難とそれに立ち向かう方向にまとめる力が強く感じられた。



これらの手記や聞き書きを読み、私は、2011年10月に訪れた陸前高田市広田町の徳山衛もりやま へいさんのお宅で、徳山さんが自分の人生を熟っぽく振り返る一代語り^①に遭遇したことを思い出した。その日、徳山さんのお宅を借りてある人から話を聞き、徳山さんもその場面に立ち会っていた。その後、やおら始まった一代語り^①は5時間半にもおよんだ。話を聞くという雰囲気^②が醸成されておき、それに背中を押されるように一代語り^①が始まったのであり、その一代語りからは、震災後の事態に人生(歴史)の側から向き合おうとする静かな気概を感じた。

これらを読み、思い出すなかで、3.11後の被災地では、ひとつの像(方向性)にまとめる圧力が強く働いており、それがかえって分断を固定化し、軋みを認め合う契機を見失わせていることを強く感じた。橘慶子さんが率直に書いたり、徳山衛さんが一代語り^①をすることができたりする関係をつくるのが大事だと思えたのである。

この点で、福島県飯館村を拠点にした「かすかだりの会」(旧称までいな対話の会)の活動は、とても貴重だった。1978年に飯館村に生まれた酒井政秋さんは、2006年に帰村し、3.11後、仮設住宅で高齢者の傾聴ボランティアを始め、2012年7月から仲間と「までいな対話の会」を始めた。

そこでめざされたのは対話である。「一方的」な話や「未来」を急ぐことが、「小さな声」を置き去りにして「分断」をつくりだす、その状況を乗り越えるために、互いの立場の相違・軋みを真剣に考え、「ネガティブな感情」も表現できる対話をめざす。話し合うのは、各自の近況、農家の問題と地方の問題、国・村・民について、宮城の復興と福島の復興などである。参加した人からは、「人の話、自分の声を聞く力を少しずつ養う」ことができた、「行政に対する怒り」や「生活への不安の感情だけが私を支配」するなかで、この会は、「喪失した悲しみや怒りを真っ向から受け止めてもらえた場所」になるといった声が聞かれた。「分断」の状況を乗り越えるために粘り強い対話がめざされ、「多様性を認めながら」「信頼関係が築かれ」、「村民一人一人の本来持っている力を取り戻す事。その気づきが真のコミュニティ再生」につながる事がめざされていた。

「かすかだりの会」の記録を読みながら、私は、気仙沼フォーラムで登壇した石巻市立雄勝小学校の先生・徳水博志さんの話を思い出していた。徳水さんの話のキーワードは「自尊心」だった。徳水さんは、子どもたちをみていて、一方的に支援される被災者では感情が落ち着かないことに気づく。支援されるだけの被災者から、主体的に取り組む子どもにも変わるために、地域復興を学ぶ総合学習が取り組まれ、子どもたち自身が町の復興計画をつくってまちづくり協議会で発表するところまでになった。「かすかだりの会」が取り組んでいたことは、まさにこの「自尊心」にかかわることだった。

「自尊心」は、「生存」の仕組みに住民がどのように関与するかにかかわることであり、私たちがフォーラムで取り組んできた「生存」の歴史をめぐる議論は、福島の問題にも接続が可能だと思えた。あるいはそのことは、津波の問題と原発・放射能の問題を分断しないことでもあった。



原発と放射能の問題で分断が厳しくなっている福島について考えようと思ったとき、私が最終的に選んだのは、小さな声に耳をすますことだった。福島では、分断のなかで、小さな声はより聞きにくくなっているように思えた。小さな声が聞きにくいために、分断はいつそう厳しいものにみえ、分断を越えるきっかけを見つけることがとても困難に思えた。だが、福島でも小さな声の片鱗は必ずあるのであり、小さな声の重要性を意識して取り組んでいる「かすがたりの会」のような存在もあった。小さな声に耳をすましたとき、徳山さんなど陸前高田市で聞いた話がよみがえり、さらに3.11後、取り組んできた気仙沼・陸前高田でのフォーラムと福島フォーラムがつながった。私は福島フォーラムで、以上の手記や聞き書きなどを紹介しながら、陸前高田市の3.11以前の取り組みと重ねるようにして福島の復興を考える視点を提示した。

2015年は阪神・淡路大震災20年である。その2015年に関いた福島フォーラムでは、小さな声に耳をすまそうとした。小さな声に耳を傾け、小さな声を記録する小さな場所を維持することを実践してきたのは、神戸の震災・まちのアーカイブであり、阪神・淡路大震災以来、私は震災・まちのアーカイブともかかわりながら、小さな声や小さな場所について考えてきた。そして、その延長線上に3.11後に被災地で友人たちと取り組んできたフォーラムがある。

阪神・淡路大震災は、私の大きな転機になったものであり、いま私はあらためて、阪神・淡路大震災—3.11—フォーラムをつなぐ地点に立っていることを実感している。



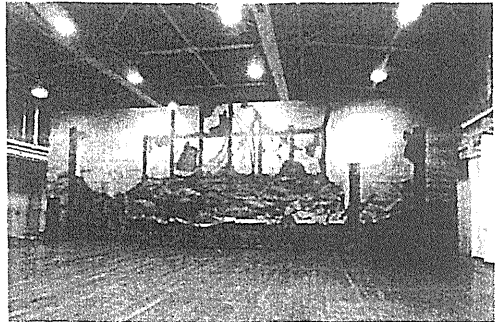
*2015年1月 KIITO (神戸)

— 飯館村から —

藤原直子

予期せぬ出来事が、人の心に影を落とす。それは、惜別の涙、拭えぬ悔恨、願っても叶いようも無くなった未来への喪失感。さまざまな思いを抱え、それでも人は徳気に生きようとする。突然の非日常を受け入れ、徳気に生きながら、やがて人は、その影とともに生きる新しい日常を獲得していく。

阪神大震災から20目年を迎えた1月、神戸市中央区のKIITOで行われた、東北と神戸をつなぐイベントのひとつに、アーカイブの一員として参加した。東日本大震災による自然災害、その直後に起きた原発事故による災害。二重の災害に見舞われた飯館村は、今も全村避難を余儀なくされている。村民である菅野宗夫さんは、この日、参加者が共有した空間と時間を圧倒し、飯館村で起きたこと、経験してきたことを語り続けた。放射能は、代々住み続けた住処、耕し続けてきた農地を汚し、そして、家族



加川広重 巨大絵画「フクシマ」

までもを離散させた。「未来が見えない」。予期せぬ出来事は、飯館の土地に住む人々に、大きな影を落とした。ある日、菅野さんは、畑の前で、失意に暮れて立つ父親の姿を見つける。そして、父親に落とされた、その深い影に、「何とかしないといかん」と、気持ち奮い立たせ、前へと歩み始める。土地を離れ、飯館村の人々と生きていくこと。新たな土地で、飯館村の人々と農業を興していくこと。飯館村のことを語っていくこと。福島のことから開いていくこと。菅野さんは、自身の非日常を懸命に生き抜く。最後に語ってくれた、「怒りの顔から、今やっと震災前の顔に戻りました」。この言葉には、4年間の厳しい日々がにじんでいる。非日常を生き抜いて、菅野さんは、今やっと新しい日常を生き始めている。

心に落とされた影は、消されることはない。その影は、不意に忍び寄り、人を悲嘆に暮れさせもするが、強くもする。その影に、押しつぶされぬよう人は健気に生きている。健気に生き続けてきた人々の影を、見失いたくない。菅野さんの話を聞いて、あらためて、その思いを強くした。

阪神・淡路大震災 20年その後

そこにあつたはずの「戦後 50年」

水本有香

2015年、元旦の新聞社社に「戦後 70年」という文字が目に入る。それ以降、新聞を開くとしばらく個人的に、阪神・淡路大震災から20年、東日本大震災から4年、仙台での国連防災世界会議にばかり気を取られていた。ようやく、ふと我に返り、2015年が戦後 70年ということは、阪神・淡路大震災が発生した1995年は戦後 50年だったのではないか、と当たり前のことを自明にするため引き算をした。あの1995年は日本にとってはもちろん、世界的に節目だったはずではないのか。1995年には各地で戦後 50年のイベントが企画され、行われていたのではないのか。いや、きっと行われていたが、私が見ようとしていなかったに過ぎない。目の前で行われていたとしても、目に入っていなかっただろう。身体的に、精神的に、そこにあつたはずの「戦後 50年」を自分の中に取り入れ、咀嚼し、自分の言葉

として理解する機会を失い続けてきた。「あの戦争は何だったのか」という問いかけがある。「あの震災は何だったのか」という問いかけもある。

阪神・淡路大震災から20年、震災後のことをすべて覚えているわけではないが、震災後5年、10年という節目は被災地にとって、自分にとっても、「そこにあつた」ように思うが、震災15年は忘れていないが段々と「そこにあつたはず」になってきていたのではないのか。震災20年が存外かつての被災地で大きく取り扱われた理由の一つとして、2011年の東日本大震災の発生、カタストロフィの影響であることは想像に難くない。それどころか、今は、「将来の歴史家によって、今が「二つの災害に挟まれたつかの間の平時」＝〈災間期〉と記述されうる不安」（仁平典宏「〈災間〉の思考—繰り返す3・11の日付のために」赤坂憲雄・小熊英二

編『「辺境」からはじまる一東京/東北論』
明石書店)と表現されるに至る。

もし、今が災間期だとしたら、同じように「二つの戦争に挟まれたつかの間の平時」

＝戦間期というところからも目を背けられない。そこにあったはずの災間も戦間も自分が見ようとすればすぐ側にあるのだから。

震災20年目の冬 区切りの時間、永遠の時間

柴田和子

今年は震災20年目ということで、テレビでは、1週間程前から連日に渡って震災関連の番組を放送していた。1月17日に東遊園地で開催された「阪神・淡路大震災1.17のつどい」の参加者は、去年の3倍で過去最多であることがニュースで流れた。毎年行われる追悼行事であるにも関わらず、「20」と言う区切りのよい数字が一気に注目を浴びる。そして、その日が過ぎると急速に関心が薄れ、やがて忘却されていく。祭のような盛り上がりとその後の静寂、その落差が今年は特に激しく、私は空々しい思いを感じていた。

それでも、「20」の数字を歳月の積み重ねの時間と思い直してみると、その歳月の重みに今更ながら感慨深いものがある。赤ん坊だった子供が二十歳を迎え、働き盛りの4、50代はもはや現役を退く年となり、高齢者の中にはもう黄泉の国に旅立った人々も多くいるだろう。一人一人の生活には、震災が起きたあの時からさらに20年分の歳月が地層のように積み重なる。そして、その重ねた上に現実の世界が成り立っている。20年分の歳月は果てしない。あれから人々はどうのように暮らしたのだろうか。20年前の地層に埋もれた震災のあの瞬間、震災にまつわる出来事は忘れられたのだろうか。

「日にち栗」。関西人は、つらい経験をした人に対して、年月がたてば辛さや痛みは薄まっていくものだと、この言葉をよく使う。私も様々な経験を重ねるうちに記憶が薄まり、それとともに心の痛みが治まるものだと思っていた。しかし、そうではなかった。

震災の調査をして出会った人たちは、辛い経験であろうとも何年経過していようとも、震災が起こった日のこと、その後の苦労した状況について詳細に話をしてくれた。話すきっかけさえあれば、その時の状況について、つい昨日のこのように止めどもなく話してくれた。考えてみれば私の義父もそうだ。義父は、大阪大空襲の焼夷弾で家を焼かれ、その日に執り行われるはずだった小学校の卒業式は、空襲の惨事で中止になった。70年前の遠い出来事ではあるが、その時の状況を鮮明に覚えていて、今でもその時の様子を克明に話し聞かせてくれる。人は、日々の些末な出来事について驚くほどあつという間に忘れ去ってしまうが、強烈な印象を持った出来事については、いつまでたっても色褪せないものなのだ。出来事を経験した年齢や経過した年数は関係ないようだ。そしてその出来事は、生活の中で折に触れ顔を出し、その人の中で生き続けていく。

そうした辛くも強烈な体験は、個人個人にとっての忘れられない体験であるが、特に戦争や震災などの災害体験は、社会全体から見ても強烈な印象を残す共通体験となる。一人一人の表現の仕方はさまざまで、内奥に沈み込ませる人もいるが、遭った体験を無きものにしない、無きものにさせないと願う人たちが数多くいる。震災以降に長く交流のある語り部の長谷川忠一さんや県外避難者を支援し続けた中西光子さんもそういった人々で、その思いに一区切りはないのかもしれない。



長谷川忠一氏からの受け入れ資料

しかし、人間には寿命があり、歳月は、確実に人に年を取らせる。20年と言う歳月は、神戸の被災地の人々にも平等に降り注ぎ、私と交流のあるお二人も高齢者と呼ばれる年齢になっていた。

長谷川忠一さんは、自分の残された命のことは気にしなくてもいいから、震災資料をどうか残してほしいとおっしゃった。中西光子さんも、体が不自由になっただけでも口は動く。震災の体験を残してほしいとおっしゃっていた。お二人は、震災体験を残すこと、震災資料を広く公開することを切望している。

区切りのない震災を伝えたいという思い

の中で、震災資料を残したいと思う人と、残さねばと受け取り、保管しようとする人がいれば、震災資料は長く永遠の命を持つことができる。震災資料を残し、資料に永遠の時間を生きてほしい、それは、まさしく人の生きた証を残すことにもなる。お二人にはそのことを依頼されたのだと思う。そのお手伝いをするのが私の役目だと思っている。

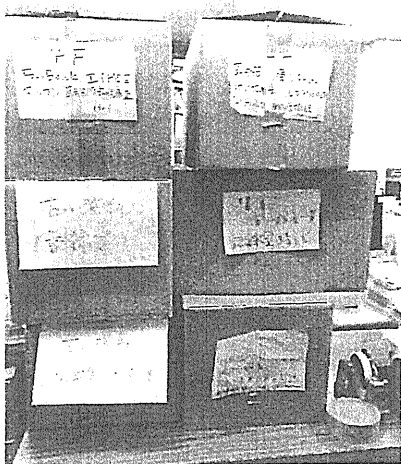
震災20年という区切りの時間は、そういった永遠の時間と陸続きなのだ。

「アーカイブ」は、だれが、何をするものなのかー20年目にして思うことー

市村登和

先月、震災・まちのアーカイブは二カ所から震災資料を受け取らせていただいた。それぞれ、震災直後から今まで、それぞれの手元に持たれていた資料である。資料として残しておられたこと、また、受け取らせていただけた、ということについて素直

に喜び感謝したい。なぜならば、「震災・まちのアーカイブ」という組織が今も存在しているので譲り受けただけ、ではなく、資料が譲り渡されるステップに至る前に人と人とのつながりがあり、その繋がり・交わりが途絶えなかったから受け取れたのだ、



市民活動センター神戸からの受け入れ資料

ということ、「アーカイブ」する「場」を残し続けていただけたからこそ、そのご厚意があってこそ資料を受け取ることが可能だったということ、そして、「阪神・淡路大震災についての教訓と防災」というフレーズが溢れ続けた歳月に、小さな組織であっても、つぶやきに心留めて活動していたからこそ、の受け取りだったのだ、ということ再認識する機会となったからである。

また、今年の1月には、KIITOで、「いいたてミュージアム巡回展」に出会った。これも震災・まちのアーカイブとしての活動を続けていたからこそ、であり、KIITOでの資料展示について、私たちが通ってきた道・年月を垣間見たように思えたのである。資料を譲り渡す決断するには、年月が必要なこともあるのだ、ということについて、敢えてここに表明しておきたい。「資料を残す「今」、託す「今」」が、いつであるのか。震災・まちのアーカイブの活動を通して、特に、時間が経過してから資料を手にすることになった時に思い巡らすことである。

そしてもうひとつ、「アーカイブ」とするとき、それは、資料自体の情報、目録

だとか由来だとか、その資料群が残されることの意義、あるいは論文に仕上げ、資料について論じる、というような資料自体が持つ「アーカイブ」されるための客観的な情報だけでなく、資料に触れる私たちが資料と関わったことについて、記して残すこと、の大切さ。これが大事なことである、ということは、最近になって実感として感じるところだ。この積み重ねもまた「震災・まちのアーカイブ」の「アーカイブ」。時間とともに積み重なっていく大事なことはないか、と思う。

それは、紙に残す、ということだけではないのかもしれない。

先日、久しぶりに、「震災・まちのアーカイブ」のホームページを開いた。旧ホームページへ と記されている先のページだ。旧ページの表紙に当たるそのリンク先には、詩が一篇載せられている。なんとなくデザインの一部と化しているのだが、改めてよくよく見ると、日本語から英語に翻訳されているその詩は、小学一年生が、授業で「こくごちよう」に記した詩の英語版。詩には「だいちがゆれる」という一行が挟み込まれている。それが、このホームページに記されることになった由縁であるのだが、その子どもも、もう二十歳を過ぎた。改めてその詩を見つけ、詩自体のこと、英語に変えて掲載したことなど、積み重なって思い出されるのだ。それは私の中での「震災・まちのアーカイブ」の「アーカイブ」である。

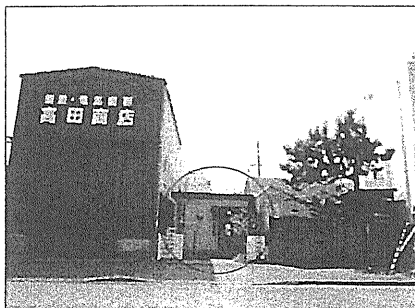
出来事を周年で区切ることにについて、私はそれを本意としないのだが、幼な子が「二十歳を過ぎた」という事実で20年という時間を実感させられる。いかに、長くて短いのか。過ぎてみて分かることであつたし、過ぎてみなければ分からないことではないか、と思うのである。

これからのアーカイブにむけて

季村範江

阪神・淡路大震災から20年が経過した。それまで主婦として平穏な生活を送っていた私は激しい揺れを経験し、自分に出来ることはないかと夢中で被災地に飛び込んだ。

当時は私のように何かに衝き動かされた人々が、たくさん被災地に集まり、ボランティア活動をしていた。それらの人々の中から、自分たちが体験したさまざまなことを後世に残したいという声が起こり、ボランティア自身が資料を集める『震災・活動記録室』が発足した。私はその活動に加わるようになった。



震災・まちのアーカイブ事務所

資料収集に門外漢ばかりのメンバーは、集めた資料をどのように整理し、残せばいいのかわからない状態の活動だった。1998年春、専門家も加わり、『震災・活動記録室』の資料を引き継いで出来たのが『震災・まちのアーカイブ』である。

震災当初、資料を集める活動を被災者の方々になかなか理解してもらえなかった。だが時間の経過と共に、震災の記憶がうすれてゆくのではないかと危惧され、記録を残すことの大切さも言われるようになった。神戸では、いろいろな組織が資料収集を始めていた。その中で、人もお金も限られた民間の私達に出来ることは何か、問いを重ねていった。

私たちはこの活動を通して、復興の過程でいろいろなことに直面し、疑問を感じ、今までとは違った生き方をせざるを得なくなった人々に、数多く出会った。ほとんどは、震災に遭遇しなければ普通に暮らしていた人々である。「防災と教訓」から抜け落ちる、ここで生きる人々に起きたこと、その中で暮らし、思い、それらを残すことが私達の役目ではないのか。彼らの声に耳をかたむけ、記録を残すことこそ私達の出来ることではないかと次第に考えるようになった。

震災から20年。私達は被害の激しかった長田のまちで資料を保管し活動してきたが、これから新たに拠点を移して再出発する予定だ。

このようにして集まって来た資料も、果たして後世まで残り、活用されるのか。民間の私達が、どの位資料を持ちこたえられるのか。震災を体験していない人にどう引き継いでゆくのか。人の力を越えた大きなものと長い時間に左右され、資料の行く末はわからない。しかし、「なくなったものは記録されなければなかったことになる」、この言葉を肝に命じて、私達は次の一歩を踏み出したいと思う。

活動日誌

2014年

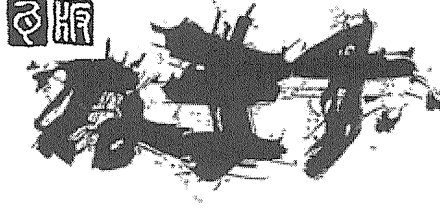
4月12日(土) 1.13トークセッションの冊子化、長谷川氏資料整理 於：事務所

- 4月23日(水) 事務所の整理 於:事務所
- 5月10日(土) 1.13冊子の相談 於:事務所
- 5月23日(金) 長谷川氏資料整理 於:事務所
- 6月14日(土) 冊子印刷の進捗状況の確認、長谷川氏資料整理 於:事務所
- 6月26日(木) 冊子印刷の進捗状況の確認、長谷川氏資料整理 於:事務所
- 7月12日(土) 1.13冊子の発送 於:事務所
- 7月30日(水) 認定NPO法人 市民活動センター神戸の資料整理について意見交換、長谷川氏資料整理
於:事務所
- 8月2日(土) 認定NPO法人 市民活動センター神戸の資料整理
於:認定NPO法人 市民活動センター神戸
- 8月15日(金) 長谷川氏資料整理、事務所の整理 於:事務所
- 9月13日(土) 長谷川氏資料整理について意見交換、事務所の整理 於:事務所
- 10月1日(水) アーカイブの所蔵資料について意見交換、瓦版「なまず」次号について 於:事務所
- 10月11日(土) 長谷川氏より住宅に関する聞き取り 於:事務所
- 10月29日(木) 瓦版「なまず」次号について、長谷川さんの資料、記録室資料整理 於:事務所
- 11月15日(土) 若原キヌ子氏より聞き取り 於:事務所
- 11月26日(水) 瓦版「なまず」次号について編集会議 於:事務所
- 12月13日(土) 1月10日のイベントについて、瓦版「なまず」次号について編集会議 於:事務所
- 2015年
- 1月10日(土) 今後の活動について話し合い、「いいたてミュージアムーまでの未来へ記憶と物語プロジェクト」「TALK」 場所;KIITO 2階会議室
- 1月24日(土) 長岡市立中央図書館文書資料室 田中洋史氏が訪問 於:事務所
- 2月4日(水) 神戸新聞社 編集局報道部 木村信行記者が訪問 於:事務所
- 2月21日(土) 資料整理の方法検討、瓦版「なまず」次号について編集会議 於:事務所
- 3月11日(水) 資料整理の方法検討、事務所の整理、記録室、長谷川さんの資料運び入れ検討
於:事務所
- 3月21日(土) 資料の搬入について、資料整理の方法検討、瓦版「なまず」次号について 於:事務所
- 4月4日(土) 資料の搬入について、資料整理の方法検討、瓦版「なまず」次号について 於:事務所
- 4月18日(土) 資料の搬入について、資料整理の方法検討、瓦版「なまず」次号について 於:事務所
- 4月25日(土) 長谷川氏の資料、認定NPO法人 市民活動センター神戸の資料の受け入れ 於:事務所
- 5月9日(土) 長谷川氏の資料整理 於:事務所
- 5月17日(日) 瓦版なまず30号印刷、発送

〔編集後記〕

▼なまず第30号をお届けします。阪神・淡路大震災から20年の号では、福島をとりあげました。今回原稿依頼時に、簡単に「福島につながる」ためにとお願いしましたが、まだその「とぼ口」にも立っていないことに気づかされました。現在、私たちは7月に福島を訪れることを計画しています。どういう声がかえるか、どういう風景が見えるか、その訪問を福島に心を寄せ続ける一歩にしたいと思います。▼この度、アーカイブの前身である「震災・活動記録室」資料を15箱受け入れました。これで、記録室資料を全量受け入れたことになります。設立は1995年3月。資料が移管されるには、20年の月日が必要でした。ボランティアによる震災資料保存活動、そのはじまりが詰まった資料です。





震災・まちのアーカイブ

〒655-0033 神戸市垂水区旭ヶ丘 2-6-7 Phone：078-798-7912

Fax：078-798-7913

明日への船出

季村範江

2017年3月で『震災・まちのアーカイブ』は結成19年をむかえる。

阪神・淡路大震災で夫の経営する長田区の会社建物は全壊した。会社は、菅原市場とJRの線路をはさんだ位置にあった。付近は、地震直後に大火災がおこり、焼け野原が広がっていた。夫はすぐに会社を被害の少なかった西区に移し、しばらくして長田の跡地にプレハブの建物を建てた。

被災地では、震災直後から支援を志す人々が全国から駆けつけた。まだボランティアという言葉が一般には浸透していなかった。彼らの中から、自分たちの活動を後世に残そうと、『震災・活動記録室』が結成された。彼らは様々な活動のメモやノート、チラシ、広報紙など雑多な記録を集めた。

私とその記録収集活動に加わった縁で、1995年秋から夫の会社のプレハブ事務所を活動拠点として使わせてもらうこととなる。当時長田区にはたくさんのボランティア団体が活動していた。彼らがこの地を去る時、『震災・活動記録室』に記録を残していった。

1998年3月、『震災・活動記録室』は、ボランティアの活動を支援する『震災しみん情報室』と震災の記録を後世に残す『震災・まちのアーカイブ』に分かれた。アーカイブは長田区の建物に残り、『震災・活動記録室』の資料を引き継いだ。その後、ここで20年近く、アーカイブは震災資料の保存と震災の記憶を後世に伝える活動を続けた。それが可能となったのは、資料を後世に残したいという情熱や信念はもとより、無償で場所を提供してもらえたことも大きな要因だと思っている。

震災から22年過ぎ、この度アーカイブの活動拠点を垂水区に移すことになった。新しい場所は今までより狭い。引っ越しに際し、今まで保管されていた資料の総点検をした。まず最優先は、今日までに寄せられた一次資料。震災関連の書籍など他所でも見ることのできるものは、場所の許す限り移した。



震災・まちのアーカイブ前事務所

一次資料は震災直後に生まれたボランティア団体が残っていたものと、震災直後から活動を継続してきたが、後にアーカイブに資料を移管したものとがある。震災後数年から十数年経てアーカイブに移管された資料は、まだ整理できていないものも多い。メンバーはコツコツと資料整理を続けているが、いつになったら完了するのかいまだめどは立っていない。

ボランティアという言葉が耳新しかった当時、自分たちの創意と工夫で懸命に活動した人々、活動の記録を長田の事務所まで運んでくれた人々、事務所に通ってコツコツと資料整理をした人々、たくさんの偶然のおかげでアーカイブに資料が残った。

先のことなど考えないで始めた民間の資料収集活動。ずっと手弁当で関わってきたメンバー。それぞれは活動を続けているうちに託されたものの大きさを徐々に自覚してきている。とは言え、私たちはもう決して若くはない。メンバーの周辺にもいろいろなことが起きている。時間と体力の許す限り、資料整理をし、その過程で見えてきたことを発信する。その気持ちに揺るぎはないが、これからどのように次の世代につなげてゆけばいいのかという課題も抱えながらの新しい船出である。

小さな声の行方

藤原直子

1998年の早春、『震災・まちのアーカイブ』は、長田区東尻池で産声を上げた。あれから20年近く、私は大阪から長田の街に足を運んできたことになる。高速長田の駅から、海の方へと真っ直ぐ歩いて10分程の道のりを、いったい何度往復したことになるのだろう。その間、全焼した菅原市場は再建され、その後スーパーになった。そして、昨秋そのスーパーは閉店。道は大きく広がり、駅前には大型スーパーがやってきた。街は刻々と姿を変え、今では元の建物さえ、思い出せなくなっている。歩きながら、ふと思う。変わり行く街で、もの言えず、埋もれている人はいないだろうか。

自らも被災した友人が、震災当時の様子を、数年経てようやく聞かせてくれたことがある。「家族を亡くした人、一時避難して神戸を離れた人、あの時は誰もが大変やったんよ。みんなが我慢してるのに、自分のことなんか言われへんかった」。こうして胸に収めた思いや、言葉を呑みこんできた人が、どれだけいたのだろうか。吐き出せない思いを持って、埋もれている人が、今もきっと何処かにいるのだろう。

誰もが大変だったその時、アーカイブの前身となる『震災・活動記録室』は、消え行く小さな声を集めると決め、活動を始めた。その小さな声の行方が、見えないままの船出だった。記録室から活動を引き継いで20年近く経ち、あの時、行方の見えなかった小さな声は、その後収集された資料と共に、今、私たちの元で重い碇を下している。埋もれたものを見過ごすな、小さな声を聞き逃がすな、震災を語る時、判ったつもりになるなど。時が流れ、街の姿が変わり、記憶が薄れても、あの時の声は変わらず、私達を戻すべき所に戻してくれる。

「まだ、神戸ですることがあるの?」。神戸に通う私に、大阪の友人達が聞いてくることがある。目を閉じ、耳を塞いでいれば、何も見えない、何も聞こえない。何もすることはない。

見ようとしなければ、聞こうとしなければ、なかったことになってしまう。誰もがしんどかった時、そして、それからのことは、なかったことにはならない。なかったことにはさせない。資料となった小さな声は、私達の元で、重い礎を下している。

今年に入って、20年近く活動してきた長田の街から本格的に、明石海峡大橋を望む垂水へと場を移すことになった。目を開き、耳をそばだて、また新たな気持ちで活動を続けて行く。

なぜ、ここで活動を続けるのか — 資料整理の視点から —

市村登和

私が『震災・まちのアーカイブ』を知ることになったのは、確か7~8行で3~4段組の新聞記事。「地震発生直後に作成した一次資料を収集している」という内容で、図書館での仕事を初めて2年程経った頃だった、と思う。

その少し前、図書館関係者向け講習会で、資料を使う側である研究者の講演を聴いた。海外では図書館以外に資料を確認する場として文書館が多くあり、そこでは一次資料や大量には印刷や刊行していない資料を収集保存していて研究に大いに役立っている。日本の図書館でもそのような資料の収集も視野にいれてもらえれば、というような話だった。資料を探し求めている人の論理として至極真つ当だと納得した。機会があれば、もう少し勉強をしたい。そんな折に記事を目にしたのだ。

まず活動日と思われる日に電話をかけた。すごく明るい声だった。「どうぞ、どうぞ、次の活動日が何月何日ですから、来てください」とのこと。一概には言えないが、図書館員は業務中およそ静かにしている。モノを扱っているし、閲覧している人もいることだし……。ちょっと、今まで

経験している資料を扱う場所とは違うかもしれない。と、思いつつ事務所に向かった。予想通り、図書館で仕事をしているのは私だけだった。幅広い年代、生業、日常の中心にある活動分野、あるいは専攻分野、一致する人は誰もいなかった。

そのようなことで、『震災・まちのアーカイブ』に関わらせていただくことになった。民間の活動を続けることで分かったことは、資料が「集まる」のは、活動や受け取った資料を通して、私たち自身が感じたことや変わったこと、想いなどを伝えていくこと、それが次の資料や人との出会いに繋がるのだ、という実感である。そのためには、外部へ資料の存在を示す必要があり、地道な資料整理をすることが、どうしても不可欠となる。これまで、「がんばりすぎない」ことで活動が続けられてきた側面があるのは確かだが、地道な資料の整理とその内容についての発信、という作業に時間を十分には割けてこなかったことは素直に省みなければいけない。



活動の様子

また、これまで、『震災・まちのアーカイブ』という団体の存続や方向性についても、折にふれ意見を交わした。CAPHOUSEでの展示が終わった後、活動が続いていくのか、そんなことを話した時もあった。「地震」「被災地」「ボランティア活動記録」にどこまでこだわって活動するの

か、しないのか。「現地保存」を提唱する「まちのアーカイブ」ということにごまでこだわっていくのか、等々について考えた時の延長に、名称を変えることなく続けてきた今の『震災・まちのアーカイブ』がある。

資料を集める場として、資料整理は基本中の基本である。私自身は、これまでも「こっそり」ということでもないが、関心分野であるミニコミ誌手が空けば資料整理の下準備はしてきたつもりである。原資料を手にとり整理すれば、資料に書かれていることはもちろん、今の「わたし」がそこから感じることも、瓦版などを通して伝えていける。今まだ私たちの活動に直接関与していないさまざまな人々に、資料にかかわる全てを伝えていく責務を果たしていくこともできるのではないだろうか。

『命のバトンリレー』再び

柴田和子

長谷川忠一さんの最後の資料の運び出しが2月5日に終了した。部屋の片隅には震災資料とみられる重いダンボール箱が積み上げられており、一緒に行ったメンバー3人とその場で段ボール箱に目を通した。長谷川さんは震災の語り部活動をしておられたために、講演活動先で配布するコピーを大量に残されていた。その中から複数枚だけ保管することで資料の分量をかなり減らしたが、その日だけでもダンボール4箱分の資料を運ぶことになった。

ご自宅からは、これまでにダンボール箱20箱ほどを運び出している。長谷川さんは被災後に避難所、仮設住宅、復興公営住宅と住まいを次々に替えざるを得なかつ

た。その間、被災した当事者や支援者たちで「語り部グループ117」という震災語り部団体を結成し、依頼があると全国の教育機関や地方自治体、自主防災組織に向向いて震災を語る活動をしておられた。自らの活動を綴った新聞記事、講演の様子を撮影したビデオ、講演先での感想文、避難所・仮設住宅・復興公営住宅などで配布されたビラ、チラシなど、震災から21年間の出来事にまつわるすべてを残していた。

神戸では、震災直後から未曾有の災害の現状を留めておくために書籍だけではなく、市民の復興の様子が分かるような一次資料も収集しようと、公的な機関が資料収集に動いた。私もその一員だったが、公的

な機関だからこそ兵庫県内の広いエリアを網羅すること、多くの団体や個人から資料を提供してもらうことが必要だと考えて収集活動を行っていた。

長谷川さんは、このような震災資料収集のことは随分前からご存じだったが、公的機関からの提供依頼に対して首を縦に振ることはなく、長らくご自宅に保管されていた。そしてその資料は、3年前から「震災・まちのアーカイブ」に寄贈されている。

それは、私と長谷川さんが知り合いだったからということだけではなく、「震災・まちのアーカイブ」の方向性への賛同によるところが大きい。震災以降、必死の思いで残してきた資料、しかし、もし公的機関の収蔵する数十万点の資料の中に納まってしまえば、埋もれてしまうかもしれない資料。思えば、ご自身の生活や活動において、災害でやむを得なかったとはいえ、公の名の下に決定された事項にしばしば翻弄されてきた。仮設住宅や復興公営住宅入居の際の一括抽選や期限付き居住条件など、大きなものから生活の安定を奪われる理不尽さを幾度となく味わってきた。自らの生きざまを象徴するような震災資料だからこそ、公に抗うものの一人として、公的機関にゆだねるわけにはいかない、という想いがあったのだろう。公的機関により担われることが多い震災資料収集の活動であるが、民間であるからこそ拾い上げられる意思というものもある。何の後ろ盾もなく、有志で担われている民間のボランティア活動は、か細いが、何者にも迎合することなくそこに根を張り、じわじわと浸透してい

く粘り強さがあると感じられたのだろうか。

1月にお見舞いに部屋を訪れると、介護用のベッドに横たわり、体を動かせないまま、声だけが響いた。余命宣告を受けて入院し、年末に一旦退院したものの再度救急車で運ばれ、また戻ってきた矢先だった。お見舞いに訪れた私に対し、生前整理をするように、残りすべての資料の早急な運び出しを依頼された。入院中の様子とは違い、憑き物が取れたようにどこかすっきりした、悟ったような顔をされていた。

そして、急きょ決まった2月5日、最後の資料運び出しが行われた。それまで寝たきりだった体を持ち上げ、しっかりとした声で資料の配置場所や分類について指示された。もう長くはない命の区切りを前に、その不思議な縁が保たれながら震災資料というバトンが渡されていく。自らの生きざまを伝える資料をなきものにさせない、という意思の下に、行き場を探していた資料たちが、やっと集結し、安住の地に辿り着くことになった。帰り際、ダンボール箱がすっかりなくなった廊下を見ながら、やっと気持ちが整理され、安どの途に就くことができるような面持ちで、それでいてもう会えない寂しさを押さえきれない顔をして我々を見送って下さったのが印象的だった。

(注)『命のバトンリレー』とは、「語り部グループ117」が2006年震災11周年で発刊した冊子名『語り継ぎたい命のバトンリレー』から借用している。

震災・まちのアーカイブ所蔵ミニコミ一覧

ouroboros ウロボロス/NEW あしながファミリー/芦屋市民学生救援隊ニュース/愛の輸運
 動/青空ふれあいセンターだより/あおぞら通信/NVNAD NEWS/ウィークリーニーズ/SVA
 活動日記/ウィークリーニーズ (すたあとと長田) /Act Together/紫陽花/ウイング通信/お風呂
 たすけあいニュース/魚通信/WEEKLY NEEDS/SPF/KSKP/広報こうべ 特別号(長田
 区)/影書房 告知板/かすみ草/きんもくせい/教区新報/記録室通信/きやっちボール/絆/上筒
 井から/QEN 隊通信/KFC ニュース/VNN 市民連合ボランティアネットワーク/救援本部
 FAX 通信(兵庫県南部地震障害者者救援本部)/港まち通信/水俣東京展 NEWS 水俣フ
 ォーラム NEWS/火曜日/関西生命線ニュース/ぐりんびいす通信/かものはし通信/KSKQ 神戸
 きょうだい会通信/神戸 YWCA 分室だより/神戸復興新聞/復活!たまねぎ/KSKP コリア
 ボランティア協会/障害者による復興救援運動<兵庫県南部地震情報>/故郷の響き声/きよ
 うどう/素手/障害者による復活救援活動 兵庫県南部地震情報/SANPO 下町通信/地震ニュー
 ース/史料ネット NEWS LETTER/視聴覚通信/障害者による復活救援活動/震災ニュース/情
 報センターネットワークニュース/須磨ボランティア便り/須磨居留通信/社会福祉復興本部
 ニュース/VNN/住民会議ニュース/市民活動センター神戸 みみずく FAX 版/みみずく/ポ
 アイ仮設ボランティア通信/障害者救援本部通信/アーキビスト/じしんなんかにまけない
 ぞ!こうほう/ふきのとう/鷹取中避難所通信/Symphony NPOシンフォニー事務局/JFC
 Views 財団法人助成財団センター/セバニュース/震災研究センター/下中島公園北ニュー
 ス/ライフライン/都市生活生協支援救援ニュース/すみとも正成 個人誌/発信ナガタ/セン
 ターニュース/戦争災害研究室だより/在宅介護ネットワーク通信/さわやかサービス北摂つう
 しん/じやりみち/市民ボランティア/それいけボイス/たきび/だんらんニュース/Touch/地球
 のきもち/地方史情報/中央区ボランティアセンターだより/てらこや通信/中央区なんでもか
 わら版べんり帳/フェニックス月が丘ステーション/てんと村だより/トウモロロー/デイリーニ
 ーズ/ドラマ通信/ドングリネット/トヨタ財団レポート/義民つうしん/なんでもかわら版
 CHUO WEEKLY 新中央なんでもかわらばん/中原中也の會 會報/広報ながた/ニュース兵
 庫県南部地震外国人被災救援委員会とよなか/ニュースリリース/ながた・関東・かわらば
 ん/ボランティア情報/労働・雇用共同デスク/なの花だより/ばびるす/ひまわりだより/ファ
 ックス市民情報/阪神・淡路被災者語り部グループ 117/ (財) 阪神・淡路大震災記念協会資
 料室ニュース/ぱーとなあ/ハートネット/バンビーネット/離子だ!/情報センター/ネットワ
 ークニュース/野田北部まちづくりニュース/場/ばらボラ/HAR 基金/春風だより/ぶどうの会
 通信/たまねぎ/被災地クラブインフォメーション/臨床心理士の活動情報誌 被災地だよ
 り/ひだまり/人・街・ながた/兵庫労働総研/ひまわりだより/ひろば/月間ボランティア/ボラ
 ンティア/ブリッジ/ボランティア NEWS/VNN/FLAP/復興かわらばん/ぶりずむ/V 日報/ふ
 っこうべ/兵庫県定住外国人復興センター/NEWS/ファックスネット生活情報/まち・コミ/マ
 ルイグループ広報誌/夜まわりつうしん/六甲ステップ/Libella/歴史・災害・人間/りんりん/
 夢創館通信/よろず新聞/わくわく神戸ニュースレター/わいわいクラブ/WAH!

震災・まちのアーカイブ資料概数（2017年2月現在）

	中性紙箱大	中性紙箱小	段ボール箱
震災・まちのアーカイブ	3	6	
震災・活動記録室	19	2	15
長谷川忠一氏資料	25	6	2
ジェネシス	2		
三浦照子氏資料	1		
すたあと長田	1		
中央区ボランティア	1		
灘ボラ	4		
コミュニティ基金	1		
映像・DVD	1		
	58	14	17

活動日誌

2015年

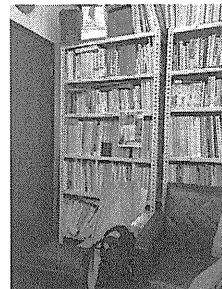
- 6月13日（土）事務所引越準備 於：長田
 7月11日（土）事務所引越準備 於：長田
 7月19日（日）事務所引越準備 於：長田
 8月8日（土）事務所引越準備 於：長田
 8月26日（水）事務所引越準備 於：長田
 9月30日（水）事務所引越準備 於：長田
 10月10日（土）事務所引越準備 於：長田
 10月21日（水）事務所引越準備 於：長田
 11月14日（土）事務所引越準備 於：長田
 12月9日（水）事務所引越準備 於：長田
 12月19日（土）事務所引越準備 於：長田



前事務所の外観

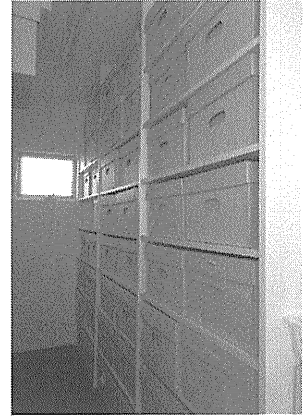
2016年

- 1月9日（土）事務所引越準備 於：長田
 2月10日（土）アーカイブ事務所引越① 於：長田→垂水
 2月20日（土）事務所引越準備 於：長田
 3月30日（水）事務所引越準備 於：長田
 4月9日（土）事務所引越準備 於：長田
 4月24日（日）アーカイブ事務所引越② 於：長田→垂水
 5月14日（土）事務所引越準備 於：長田



前事務所の内観

- 5月28日(土) 事務所引越準備 於:長田
 6月4日(土) アーカイブ事務所引越③ 於:長田→垂水
 6月25日(土) 事務所整理 於:長田
 7月10日(日) 事務所整理 於:垂水
 7月30日(土) 事務所整理 於:垂水
 8月16日(火) 事務所整理 於:長田
 9月3日(土) 事務所整理 於:長田
 9月17日(土) 事務所整理 於:長田
 10月8日(土) 事務所整理 於:長田
 10月29日(土) 事務所整理 於:垂水
 11月13日(日) 事務所整理、瓦版「なまず」次号について話し合い 於:垂水
 11月27日(日) 事務所整理、瓦版「なまず」次号について話し合い 於:垂水
 12月11日(日) 事務所整理、瓦版「なまず」次号について話し合い 於:垂水



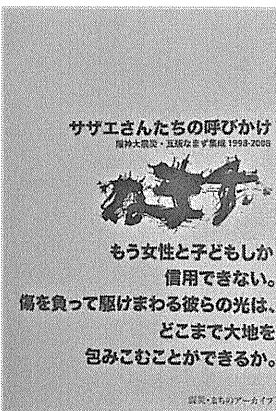
新事務所内の資料棚

2017年

- 1月15日(日) 事務所整理、瓦版「なまず」次号について話し合い 於:垂水
 2月19日(日) 瓦版「なまず」次号について話し合い 於:垂水
 3月19日(日) 瓦版「なまず」第31号印刷、発送 於:垂水

編集後記

引越しは、大きな「転機」である。震災・まちのアーカイブは、昨年1年かけて、長田区から垂水に引っ越した。室内にあったすべての収納棚や本棚を総点検し、一つ一つ箱に収めていく。重複するものは、数を減らし、何度か垂水と往復しながら、資料の入った箱を運んだ。



瓦版なまず集成

19年間の間に集まった資料の箱を前に、新しい事務所で、心新たに次の活動をどのようにするか話し合った。高度経済成長期以後、はじめて街を襲った大災害を契機に立ち上がったボランティア組織のアーカイブ。私たちは、何を目指したのか。何が出来たのか。私たちは、『なまず』を手掛かりに、活動を振り返ることから始めることにした。

その作業は、同時にアーカイブ所蔵資料を理解するための「メタデータ」(資料情報)となる。一体、どのような資料が、どのような活動の中でアーカイブにやってきたのか。次代の人たちが資料を理解するためには、不可欠の情報だ。私たちは、未来に資料を送るため、次の一歩を踏み出す。(佐々木和子)

サザエさんたちの問いかけ

阪神大震災・瓦版なまず集成 2009-2017

2018年7月31日 発行

発行者 季村範江

発行所 震災・まちのアーカイブ

〒655-0033

神戸市垂水区旭が丘2-6-7

印刷・製本 商工印刷

平成 30 年、兵庫県は成立 150 周年を迎えます。この節目にあたり、ふるさと兵庫を再認識し、新たな兵庫づくりを考える機会とするため、当該事業を実施します。

